

山 柳 雅 証

麻生路郎\*主 宰



mio

Pensoj fiagas trans la land-limon

The Senryu Zasshi No.332

新 春 號

昭和卅年一月二日發行第七卷第一號  
倉千九百三十三號  
三百卅二號

# 本社新春川柳会

あけましてお目出度うございます。一九五五年もお互いに朗らかに句を作りましょう。新春句会をいやが上にも賑々しくするため万障を繰合せて御出席下さい。

日時 一月九日(日)午後二時—五時半  
会場 光明寺

大阪市天王寺区下寺町二丁目バス停前  
(市営下寺町又ハ日本橋三丁目下町)

麻生路郎先生  
米田三男之介先生  
句と画の

## 合作色紙展

一月十一日(火) 十六日(日) まで

明けましてお芽出度う存じます

さて此度御承知の麻生路郎先生

(川柳)と米田三男之介先生(画)

に乞い合作色紙を展列致します

何卒万障御繰合せの上 御光臨

御清鑑の程御願ひ申し上げます

アベノ

近鉄百貨店美術部

(四階)

挨拶 中島生々庵  
柳話 麻生路郎  
廿九年度不朽洞杯争奪決戦 麻生路郎選  
(出場資格・廿九年度、兼席各題天位獲得者)  
兼題 「女医」(三句) 中島生々庵選  
「正直」(三句) 市場没食子選  
「インタービュ」(三句) 正木水客選  
席題 四題 (題及び選者は当日発表)  
川柳紅白試合 出席者 全員

余興 出席者有志  
表彰 廿九年度不朽洞杯優勝者  
呈賞 一ヶ年間本社句会全出席者  
★各題天位★兼題「女医」  
★天位に不朽洞賞★紅白  
★試合優勝側全員に租賞  
会費 五拾円  
★乞御注意 開会時刻は今月に限り午後一時です  
幹事 ゆずる・杏花・賀峰・一瓢・潮花・圭三  
摩太郎・愛論・白水・凡九郎・淡舟・し  
げお・梅里・紫香

## 詣 初

社音社社  
大観神神  
吉間鳥違  
住水大方

南海電車



高血圧を  
忘れよう!



サーピナ錠

1日1~2錠で高血圧の苦しみを忘れるサーピナ錠!成分含量も多くてお得です

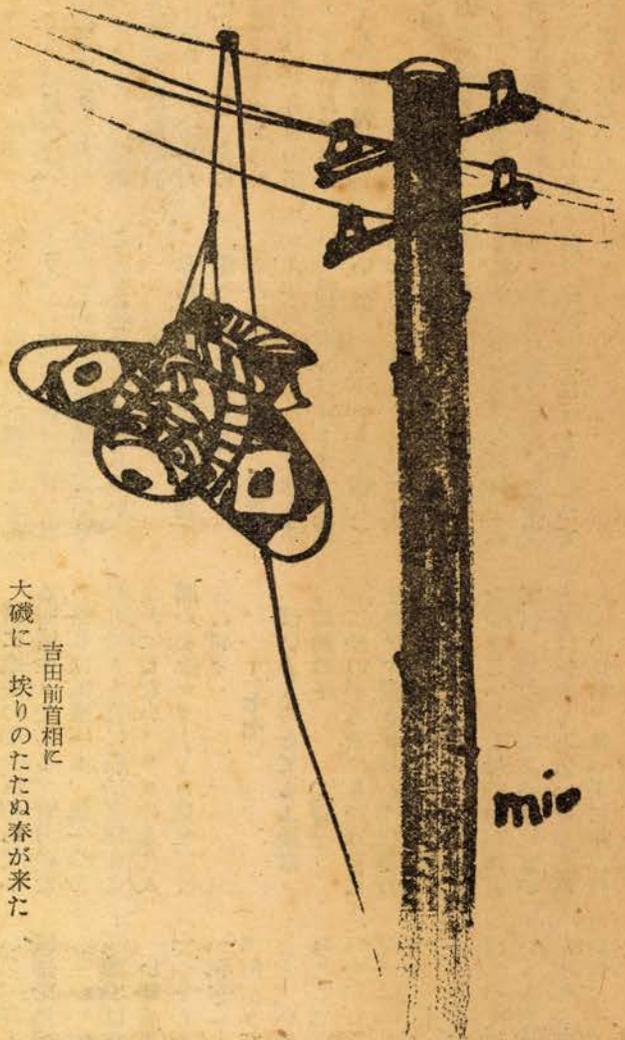


大阪名菓  
もろか民のわらわ  
源氏いぬや

百貨店著名菓子店にあります  
大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九  
民かまど本舗  
電話 三三〇九

# 不朽洞句帖

麻生路郎



吉田前首相に  
大磯に 埃りのたたぬ春が来た  
一年の第一日にプラン無く  
四方拜 ことしも約手割れるよう  
社長からして 寝正月するとう  
字割など数えるひまも春のもの  
元日だ 米ソのことは忘れよう  
晩酌の 教授は神を信じない  
豆秋に  
あはははは 君までがもう還暦か

mio

## 新春號目次

川柳座談初詣	鮎美・白柳子	(一〇)	
新川柳鑑賞	没食子	(一〇)	
〇とつけた話	麻生 路郎	(四)	
川柳映画化の可	井上 湧三	(七)	
能と困難	戸田 古方	(四)	
ねずみの習性	丸尾 潮花	(三〇)	
三 國 志	東野 大八	(三五)	
不正直者が馬鹿	長野 文庫	(三〇)	
吾れ若し妻なり	諸 家	(二六)	
せは	増本 翠露	(三)	
つまるものにし	品川 陣居	(六)	
川柳は社会人	八木摩太郎	(三)	
相手に	サラリーマン句集	久保 和友	(三)
不朽洞句帖	麻生 路郎	(三)	
近作柳輝	麻生路郎選	(八)	
川 柳 塔	北川春葉選	(六)	
同舟近詠	諸 家	(三)	
一路集	「商人」	西尾 葉選	(二六)
「舌」	新川 博也選	(二九)	
川柳第二教室	戸田 古方	(二)	
各地柳壇		(三)	
柳界展望		(六)	
不朽洞会から		(三七)	
公私雑記		(三九)	

題 字……………麻生 路郎  
表 紙……………米田三男之介



# 新川柳鑑賞

## 麻生政房

〔七三〕

草月流鏝だけでは手にお

えず (久子)

大ていのことには驚かない  
女性も、草月流にはタジ／＼  
としたことであろう。「芸術  
新潮」で草月流の芸術論を説  
まされたことがあるが、凡人  
には一寸消化しきれないもの  
がある。「鏝だけでは手にお  
えず」には流石に草月流の宗  
匠もギャフンとまいらざるを  
得ないであろう。皮肉な句  
だ。

〔七四〕

だが君蜘蛛の努力も学

ぶべし (粗影)

「だが、君」と話しかけた  
形式をとつているが必ずしも  
相手方がある訳ではない。む  
しろ自分に云い聞かせている

と見た方が面白い句である。

川柳と格言とは違うが、この  
句などは格言的川柳だと云え  
よう。二音、二音、七音、五  
音の形式が句意を強めている  
ことも見落してはならない。

〔七五〕

春だそれツ 記者は動物

園へとび (野甫)

春だ春だ——。ことしは何  
んの年だ。そんなこと知るか  
い。動物園へ行きさえすれば  
いいんだ。チャンと準備して  
待つてくれるよ。ヘー、  
羊の年ツであるのかいと云う  
訳。万事はカメラが片づけて  
くれる。巧みな穿ちの句であ  
る。記者の張り切つた態度  
が、叙法の上にはとばしつて  
いる。

〔七六〕

金のない明治生れは放つ

とかれ (不水)

既に過去の夢を反芻してい  
る明治生れである。資力のな  
い限りは電話一本、机一つの  
会社でさえ彼に椅子を興えよ  
うとはしない。サビの来た人  
間の姿をマザ／＼と見せてく  
れた句。

〔七七〕

ばい／＼のとても上手な

二號の子 (珊瑚枝郎)

オモチャ視され易い。旦那の  
来ない時の母の手に、或は近  
所の人の手に——。とても人  
なつツこいのも母の血が流れ  
ているからであろう。ばい  
／＼ばい／＼と云いながら帰  
りゆく旦那、母の手に抱かれ  
てばい／＼をささされている、

そうした情景が眼に迫るよう

だ。表現上の技巧にソツがな  
いし、穿ちの点から云つても  
繊細で適確である。

〔七八〕

酔つばらつて殴つて欲し

い時もあり (牛耕)

「つまんないわね」  
「何が」  
「何がツて、斯うして、あな  
たと、いつまでも平々凡々と  
暮らしているのがさ。」  
「で、どうしろと云うの  
だ。」

置き去りの米にボリスの

非力なり (麦太楼)

車中がかつぎ屋の一せいの襲  
撃がある。かつぎ屋は闇米を  
置き去りにしたままバタ／＼  
と消えて行く。ボリスがアミ  
棚やシートの下から米袋を引  
きすり出し車外へ放り出すの  
に案外非力だったので、女の  
かつぎ屋との対照に興味を感  
じたのである。写生句として  
面白い。

〔八〇〕

男臭い部屋ねと窓を開け

られる (ひか平)

書棚、机、灰皿、万年床。  
枕許には文春が投げ出され  
てある。

刀三の句に、

恋の疲れズボンを敷い  
て寝る

というのがあるが「男臭い部屋ね」の句は女の方がいささかまいつているのであろう。人物が躍動している。

〔八一〕  
惚れた弱み彼女の連れの手まで拂い (乗身郎)

彼氏と彼女と彼女のフレンドの三人。映画見物でもいし、喫茶店でもいし、デパートの化粧品部でもいし。

「あんた、どれ。」  
「わたし、コレがいわ。」  
「ジャア、一緒に拂つといてネ。」  
という訳である。

彼氏が今日貰つたばかりの月給袋は何等の抵抗もなく、ムゲンに破ぶられたのである。弱き者よ汝の名は……。

〔八二〕  
五尺八寸二つに折つた御挨拶 (白水)

近ごろの青年は瘦軀長身型で一様に背が高くなつた。五尺八寸はザラにある。背丈までがアメリカ式になつて行くらしい。

それが電車の中などで、短軀デブ型の先輩に出会う。向うは「ヤア」とアツサリ云うが、こちらは五尺八寸を二つに折つてインギンな挨拶。い

かにもユーモラスな風景である。ソコを巧くキヤツチしたのである。五尺八寸を二つに折つた挨拶と云う文字から特に家庭のよさが感じられるのも面白い。

〔八三〕  
辛抱して呉れる養子はちと足らず (八ッ茶)

養子ばかりは、切れすぎて風波が起るし、全くの薄ボシヤリではつとまらない。「オイ意気地がないぞ、オレならとうの昔に飛んで出てるとこじやが……」

と友達におだてられても、「ソヤ、オレはなんでこんなに意気地がないのんやろ」

と、それこそ人ごとのように云うのである。養家の方では「養子がモ少し、しつかりしていて呉れたらと思ひます、が、しつかりしていたら、うちなどにとて辛抱して呉れまへんやろ」といささか諦めてもいるのである。

〔八四〕  
底にたまつた牛乳を勿体なしと見る (水客)

牛乳を飲んだあとのコーヒ茶碗の底に、牛乳がホンの少しばかりたまつてゐる。なん

だか、勿体ないような気がして、又茶碗を手にする。それは胃袋へ送り込むにはあまりに少量ではあるが、たしかにそんな気がする。穿ちと云つてもホントにデリケートな穿ちである。

〔八五〕  
大往生とは弟子達の作り事 (弓削平)

「流石に老僧はエライもんですよ。眠むるが如くに大往生を遂げられました」  
これは弟子達が檀家の人達への報告であつたが、その

実、それは弟子達の作り事であつて、老僧の死は俗人と何等変りがなかつたのである。

〔八六〕  
大工には素直に動く鋸であり (侃流洞)

大工さんがノコを使うと、板ぎれが紙ぎれでも切つてるようにスツ／＼と切れて行く。素人の手にはギシ／＼、ガチャ／＼で、なか／＼素直には切れて呉れない。そこをとらえたのがこの句である。

要は大工とノコに限らない、人間も亦使い手にあることを諷刺したのである。ついそこに轉がつている材料をうまくつかんだ句。

〔八七〕  
角帯のこども株式会社なり (巻雨)

株式会社殖えたことは戦後の一つの特徴である。税金の關係から小ツぼけな株式会社がウンと殖えた。角帯をしてゐるので個人商店だとばかり思つていたのに、ここまで

が株式会社かと驚いたのである。「角帯」が川柳の眼だ。

〔八八〕  
銀行の門燈やもりが来る暑さ (紫香)

銀行、門燈、やもり、なんだか、ジリ／＼暑さを感じられる句である。叙景句にしては人間臭さを強烈に発散している処が俳句と違う。

〔八九〕  
又かいなと大阪城を案内し (多久志)

次々と郷里から人が来る。見物となると先ず大阪城を案内することになる。コンクリートの天主閣から、大阪の街を見降ろすと、大いのところは見えたような気になれるからである。この句、又かいながよく利いている。

〔九〇〕  
鏡台を並べてみんな不俾せ (白星)

一説して色街風景であることに間違ひはないが、華やかであるべき筈の鏡台がズラリと並んでいても、チツとも浮いた感じがしないで、むしろ一つ／＼の鏡台の持ち主の悲劇が想像される暗い句である。

〔九一〕  
歳は歳だけの素顔となり寂し (没食子)

鏡の中の自分の素顔をつく／＼と眺める。いつのほどにかヒフがたるんで若さが消えてゐる。年は争えぬと思う。「寂し」の語、軽く扱つてはあが多少説明的である。

暖房の  
一ぱい！  
又格別



アサヒビール



すねている間がおしい歳になり  
おれも小心小心せまいぞ  
豊中市 戸田古方

犬つれて朝の散歩の儲け口  
渡り鳥湖畔の宿の景になり  
尼崎市 水谷鮎美

闇米を賣つて農家も單車など  
早いものだすまた来た赤い羽根の候  
貸借は別だと借借書をとられ  
大阪市 市場没食子

遺産より欲しいと思う父の歳  
無理ですわ産めぬあたしと知りながら  
近寄れば油画のよな化粧して  
嫉くのではないかと体をいたわれ  
会わす人あらばと聴診器をしまし  
老夫婦達者で養子無駄に老け  
ホノル、市内藤草一郎

追いまわす爲に晝食よんでくれ  
云い足りぬ下手を相手は知つて  
猫の事まで近所なら聞いてやり  
宿に寝てズボンの筋をゆがめたり  
米子市 三鴨美笑  
東京都 藤本満年

寒月はあしたも寒い照しよう  
プロ野球また英雄をつくり出し  
布施市 吉田水車

薬局はほこりだらけのものをくれ  
秋の花淋しいながら咲き乱れ  
人間が眞つ正直ですぐ怒り  
足の裏見せて如意輪觀世音  
鳥取市 大西八歩

駅前は大坂弁に儲けられ  
脳病を治すお寺と書いてある  
句集刊行  
大阪市 須崎豆秋

師の序文三尺下がりいただきぬ  
貸切のバスがつぎ／＼先に来る  
感覚のすれを課長も気づいて居  
まあ上れ上れと病人だけが云い  
蟹の味旅もひとりの箸枕  
かまぼこの白が歯にしむ秋の膳  
和服の方が好きと云うたをおぼえて居  
池田市 黒川紫香

くつたのない生活へオルゴール  
しようもない事で夫を呼ぶ若さ  
借り傘が邪魔になつてるコップ酒  
断ち鉄惚れた男の爪も切り  
掃す気になつて玄關の灯をともし  
薄化粧して病床で本を読み  
惚れ切つて藤十郎になれぬ恋  
大阪市 丸尾潮花

人生論缺の音と共に芽え  
年末の企画に一本つけさせる  
妻小柄踊りに襦袢借りられす  
落籍されて市場へ行くも嬉しそう  
森山壮君へ  
大阪市 水谷竹莊

牡蠣船の障子もあかず冬の底  
うたゝねの顔へ廣げた舞い扇  
大阪市の北川春巢

日曜の午前は爪を切つたさけ  
急逝へ飲んだ思い出ばかりなり  
岡山県 浜田久米雄

四十五の老眼鏡を派手に持ち  
大阪市の菊沢小松園

儲かぬ受話器はガチャリ音を立て  
美容院出て二三間足早し  
岡山県 逸見灯竿

五十年生きて元旦おそろしく  
銀婚式祝つて呉れたのが一人  
大阪市 武部香林

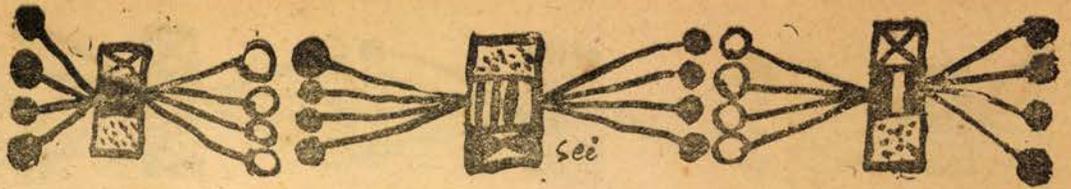
やみ米で貯めたとしても巾が利き  
早出してこんな広い朝の駅  
二次会の留守に男の子が生れ  
岡山市 大森風来子

妾宅の雑煮へスクーターで来る  
出雲市 尼緑之助

主人今日妻の意見にふくしとき  
くだかれて見たいと或日の女事務  
下関市 弘津柳慶

主人今日妻の意見にふくしとき  
くだかれて見たいと或日の女事務  
下関市 弘津柳慶

主人今日妻の意見にふくしとき  
くだかれて見たいと或日の女事務  
下関市 弘津柳慶



鳥取市 杉谷 湖山  
通信簿おつちよこちよいの兒ではない  
思事みんな砂丘へ捨て、竹ち  
しんがりに卒業をしてふところ手  
ポストンはおしめ雑誌に哺乳瓶

兵庫縣 小西 無鬼  
纏め度い思案へ振り邪魔をする  
尼崎市 小林 文月  
改札で逢いし彼女は母をつれ

福岡市 山根 白星  
バーテンの少々キザなフランス語  
お尻からドシンと坐る好きな人  
妻と来たデパート夢のなさ過ぎ

大阪市 富岡 淡舟  
僕の息がつまりそうなる十二月  
時勢には勝てず菊などいぢる父

奈良縣 飯降 白香  
寂しさは音楽喫茶へしけこませ  
慾情はざくろのやうな傷となり

奈良縣 西辻 竹青  
何とでもしてゆきますわと女すね  
恢復期妻は散歩の下駄揃え

宇部市 長野 井蛙  
宿題の障子でゆれる吊し柿  
税務署の狭量粗茶へ手も触れず

布施市 森下 愛論  
女房の日記子供のことばかり  
吊革に酔どれの手と働く手

岡山縣 直原 七面山  
逢曳に又友の名を拜借し  
友情を強要する程落ぶれて  
父還る子よりも母が張り切つて  
エプロンの白さに主婦の威厳を見

鳥取市 河村 日満  
残骸のようにボートが並ぶ浜  
逃げ腰のまゝで蝗も息を入れ

淡路洲本にて  
くわいらい師三人共に汗を拭き  
三日程洲本で庄助さんを真似  
歌の鳥絵の鳥宿は詰め込まれ  
現金で呑んで二合を超過せず  
成せばなる努力は寄附の世話をして  
ランニングもとの少女になつて去に

愛媛縣 姫田 夕鐘  
家計簿へ酒は左と書いて置き  
祖父さんの植林で小面にくゝ喰い

岡山縣 福島 鉄兒  
インフレにあえぎデフレで失業し  
虫けらの如くに生きんと思う日の

大阪市 谷内 一草  
道草のゴジラ手に汗をにぎらせる  
秋刀魚焼く影が狸に似たあわれ

大阪市 榎南 夏六  
よく歩いたものだ足跡も残さずに  
働くのが趣味の社長へ追いつけず  
動かないようでもどぶは動いてる  
何云うても反対されて淋しけれ

人間が嫌だとはおちぶれてからのこと  
辛抱が過ぎた神経痛の顔  
長い道草だつた老いの灯の

大阪府 西 いわを  
口説かれて見たし座敷にある炬燵  
校長さん昔教えた子に酌がれ

高雄鏡楓  
お遍路を中に紅葉は写される

岡山市 服部 十九平  
養老院田と銭とを間違える  
再婚を都会の叔母にすゝめられ

岡山縣 大森 娛 句樂  
合掌の間から初日炎え  
こんな時出ねば幽霊などは嘘

兵庫縣 若林 草右  
口で打ち口で投げて草野球  
瓦屋がとらぬタヌキの十二号

文化章お寺詣りがみな貰い  
白魚の手に体温計よく似合い  
パチンコと言えず会議で電話切り

大阪市 足立 春雄  
止り木に止つた様にバーで飲み  
母ちやんと無理に云わせる気にもなり

熊本縣 有働 芳仙  
末だ唄が出ないに酒の底が見え

高知市 大西 迷窓  
話の行詰り猪口へ手を伸ばし  
好きになりかけたお方は轉任し

酔い覚めて父であつたを感じる日  
恋しいわなどと十代ませかける



大阪市 地俱山風楼  
 明けすけに泣けぬ二号の御焼香

下関市 石川侃流洞

奥の間は切り張りにして冬支度  
 思い出し笑いへ月曜日の視線  
 不手ざわを幹事のせいで事がすみ

広島県 山田季賛

勤続十年出世もせずに持つ筈  
 物が無いと言えぬ時代で苦勞する

大阪市 山本葉光

酌ぎこぼし笑つて過去にふれさせず  
 人間の機嫌で猫を甘やかせ  
 大都會何とか生きてゐるばかり

倉敷市 木村千容

京呉服時代のズレが目にあまる  
 忠言はいと簡單に否定され  
 同権は僕にも筈持たされる  
 床飾よして日の出の幅をかけ  
 人様の色にしみこむ弱父

倉敷市 田垣方大

死ぬ少し前まで五十の子を叱り  
 もう一度最敬礼をする賞與  
 金のない同情深刻がるばかり  
 見えすいた嘘も怒れぬ未亡人

石川県 那谷光郎

鍋も使えて新妻見直され  
 注射の手花も活かして女医の暇

石川県 野村味平

爪弾きへあきらめてゐる唄をのせ  
 ガミ〜とやうて気のすむ男親

ふところ手男はいいなとやらやまれ  
 大阪府 木村水堂  
 病院が板についでる無精髭

熊本県 楠田英子

貴方と二人旅にも出たい空なりき  
 表情と別な心をもてあまし

堺市 八木摩太郎

税吏来て猫にさかなを食われたり  
 新党のために故郷も見捨てたり

高槻市 福田丁路

嘘だけは一分の隙もない男  
 樂燒の出来損いを褒められる

倉敷市 水谷谷水

一日一日マスターだけが老けてゆき  
 沈む陽へ住んで見たいな漁師町  
 十人が十人芸がないか飲み  
 しりうまにのらにや資本家側にされ

倉敷市 相原一善

明日は明日女一氣に飲みほして  
 後釜に座る氣小供手なすけて  
 與太者をさばいて近所に恐がられ  
 なりふりをかまわぬ妻を淋しく見

岡山県 岡田夜潮

表彰は嫌だが洩れりやうら淋し  
 表彰式妻無精髭刺つてくれ  
 人気知るために引退はめかし

岡山県 政田大介

愛妻家だから二次会袖にされ  
 先生が返事に困つた避妊薬

岡山県 岡村牛耕

親切を受ける決心まだつかず  
 御見合が続き算盤合いません  
 同期会下戸片隅で拜聴し  
 改札を失意の男押し出され  
 裏町の詩人の茶葉虫が喰い

岡山県 本田恵二朗

国会ゴツコしたのよセータやぶいて来  
 こゝに来て泣けとや星が流るゝよ

岡山県 本田恵二朗

「男女七才」で育つたことをくやしがり  
 路地裏のうるさゝ甘さこまやかさ  
 軍服の夫の若さへこころも老け  
 表面は虫も殺さず困つとり  
 呑みな〜とはこの口縫うつもり  
 アナタツその一声が苦手なり

大阪市 眞鍋一瓢

玉の輿に乗つたのにしちやこまか過ぎ  
 禿げてゐるからつて重役ぢやないよ君  
 立話雲の流れは見て居らず  
 手土産は取つときながら貸し渡し  
 その外の世間は知らぬお女将さん  
 男運妻の手相にやないそうな

大阪市 永田六龍子

せめてもに盲母に見せたい角かくし  
 大男階段一つ一つおり

豊中市 村上ゆずる

鳥取市 森本法泉子  
 ビンと来ぬまゝに文化の日を休み  
 療養所汽車から見ればいゝところ

大阪府 尾野おさむ

残酷な男の愛をまだ信じ

大阪府 尾野おさむ



山の灯へ女は窓を離れない

大阪市 兒山紫郎

残酷な心は淋しく笑つてた

大阪市 飯島二桂

泣かない女なあに人前だけのさ

大阪市 岩島雄歩

恋を得て窓から見ゆる山青く

大阪市 後藤梅志

ボロ家で根性までも小さくなり

古本屋暗いところで何か書き

大阪市 小池しげお

妻の留守婦人雑誌のひろい読み

齋場へ代理今来て今帰る

川西市 竹内圭三

又部屋の模様変えてして新世帯

年頃の娘賣られるように嫁き

頭敷に切る庖丁は暇がいり

療養の身にも夢ありマニキュア

倉敷市 藤井春日

捨てられて李さんとかに拾われる

女事務一ぱい飲もうと洒落くされ

辻びらの裸をキヨトンと見ていたり

岡山市 津田麦太楼

追立を喰うてやたらに釘を打ち

流し大工には台風様々

針箱にやつぱりあつた熨斗一つ

総入歯舌で浮かして嫌がらせ

米子市 小西雄々

女人と見られたくない帯を替え  
警笛が少し怒つた立話

元日の柏手鳩も知つている

岡山県 浜野奇童

お手酌でお飲みと妻は外出着

表彰をされた日もあり子沢山

吹田市 橋本幸男

寄附金をあてに招待状が来る

辻易者ビルの谷間に灯を点し

堺市 高崎雄声

井戸ばたに人のそしるを聞いて寐る

岡山県 三枝一策

夢ぢやけどどう〜キスをしてやつた

講演の最なかに誰か去ぬ気配

大阪市 若本多久志

家計簿は夫に見せるだけで済み

我が過去にふれた映画に目をつむり

岡山県 小原宇柳

そこばくの銭を数える灯が寒い

孤独です影もさびしく背をまるめ

島根県 藤井明朗

菊畑父の遺した趣味を継ぎ

隠し芸二次会迄も引張られ

岡山県 永松東岸子

おもむろに校長固い洒落を言い

同窓会二号になつたのも来とり

同窓会開けと淋しがり屋から

寢室と一目で知れる窓あかり

兵庫県 小島無聖

闘争に洗練されて交れず

倉敷市 野田素身郎  
ちよつとすねて見たのにあの人本気にし

もの云うばかりに田舎ものと知れ

倉敷市 安原斜木

追憶は妻が残せし衾の垢

画家志望果ては夜店の似顔書き

大阪市 西川恵風

青春は手紙辞典も書架に置き

来賓競争殿りまでも賞があり

倉敷市 矢吹日出雄

宣傳車子供の人氣にもてあまし

婦人科へ女房中々腰あげず

吹田市 菊田いさむ

社用には階級がある汽車に乗り

もつ人が持てば指輪も光り出し

尼崎市 中塚夢生

四人目ともなればガタツク乳母車

赤ちやんを貰つて来てと多愛なし

未亡人調査

六十二の母に特技も書けと云う

大阪市 節間杏花

顔色の悪さに気付くひるの風呂

孤独ふと博物館へ足を向け

衣すれに背廣の膝を固くする

釣り上げるとこまで散歩見て帰り

人形の嬌態に隠れた文五郎

今更ダンスの稽古もおかしくて

比叡山にて

ケーブルへ谷間は秋の色を見せ

大阪市 神谷凡九郎

流れ雲俺にも似たる動きよう  
青春のよきはあんなにも笑え

# 初詣



水谷 鮎美  
清水、白柳子  
市場 没食子  
司会 麻生梨里

梨里Ⅱ早速ですが初詣に就いてお話し願いたいと存じます。戦時中は神風の何のと云い必勝祈願とかで、国民こぞつて氏神様に参拝しなければならぬかの様な状態でありましたが終戦後は国土は焼けるし、戦争には負けるしで、神様も一寸シャットアウトを喰わされた形でした。しかし世の中も落ち着いて来ましてし、昨年あたりから初詣をする人もずつとふえて来た様に思います。皆さんはお詣りをなさいますか。没食子さんからどうぞ……。

没食子Ⅱイヤ……僕は貧乏暇なしで、三ヶ日は毎年寝正月することにしていますので初詣と云うキツチリした名のつく様なお詣りはしません。

鮎美さん、どうですか？

鮎美Ⅱ梨里さんが云われた様にどうやら昨年当りから初詣と云う感じが行き渡つて来ましたね。昨年は自宅で心ばかりのお雑煮とお屠蘇を頂きまして、素盞鳥神社に参詣しました。今は尼崎市ですが以前は大庄村の村社で神主さんも居りません。青年團が管理しているお粗末なお社です。子供に誘われて詣つたのですが、掌を合して拜むのも、以前の様な気持は起らず、形ばかりで自分でも恥しい様です。しかし世の中も段々治つて来て、また以前のように神様に何かお頼りすると云う気が私達の年配から若い人達に傳わつて行くのではないかと思つています。

白柳子Ⅱ終戦前から一年もか

かきすに伊勢大神宮に初詣をしておられる方を知つていますが、その人の話では終戦後三、四年の間はそれこそ、ひつそりとした、みぢめな状態であつたのが、廿五年からは戦前に劣らず初詣が盛んになつて来ているそうです。殊に廿八年十月の遷宮後は戦後最高の人出であつたそうです。鮎美Ⅱそうですか。白柳子さんはその方に関係の深い仕事をされているから、そう云う話題は沢山持つていられるでしょうね。それであなたはお詣りは……

没食子Ⅱそうすると僕だけ無

信心で、氏神様へも詣らずに寝正月やつているわけですねその変り家内と子供が氏神様へお詣りしてくれます。鮎美さん、あなたの句に  
神主の姿あり／＼初日の出  
と云う句がありますなあ。鮎美Ⅱその句が出来ましたのは、私の三男坊が十二月の二十九日に生れまして、後三日程したら年が変る、三日位で一つ年をとらすのは可哀そうだと、その頃は一月一日生れにすると云うことを聞いてましたので、妻と相談しまして正月生れにすることにしました。さて名前をつけるのに色々迷つたのですが、竹善と竹喜と二つ選びましてどちらもタケヨシと読むのですが、こ

れを奉書に別々にした、め封筒に入れ、長男と一緒に伊勢神宮へ初詣に行きました。

まだ明けやらぬ玉砂利を踏みしめて内宮にぬかずき、お神樂を上げさして頂き、合掌の後、長男にその一つを取らしましたら「竹善」と云う方が出ました。それで心がぎつぱりしました。この時精神主さんなり、太鼓、鈴の音、ミコの姿などが神々しく見えたことはありませんでした。帰途、宇治橋の傍で初日を拜んだことは今に記憶しています。この句では事実と相違している点もある様ですが、その時の句です。親馬鹿と云うのでしようね、今でしたら生命判断か何かで見つたかも知れませんがね。没食子Ⅱ僕の家内も一月一日生れですが二、三日延びているかも知れませんが。間違いない云うてますけどね（笑声）鮎美Ⅱひどいものになると半月位違うのがありますよ。僕の柳友、大西柳堂の句に「誕生がお元日にしてつまらない」と云うのがあります。没食子Ⅱそうですね、それは家内も云うてます。誕生日やからと云つて特に何もして

もらえないのでね。

鮎美「今年は伊勢詣りのキツプで生きた羊が当るそうです  
ね。」

没食子「何時頃だったか、九州へ行つた時太宰の天満宮で生きた牛の賞品が出ていまして、ウワーこれやあと思つた事がありましたかね。干支に因んだ賞品でも牛や羊はいくけども己の年やから云うて蛇なんか貰うたら難儀やがな  
(笑声)

梨里「お稻荷さんは初詣はしないのですか。」

白柳子「そんな事はありませんよ。お稻荷さんと云いますと誰でも初午と云うことに重きをおいておられる様ですが信仰する人にとつては矢張歳旦のお詣りはかゝせない行事の一つになつてゐるようですよ。」

初詣り焼鳥の香もブンと  
来ず  
(翠 芳)

と云う句がありますが、伏見稻荷神社の参道にはずらりと焼鳥を賣つてゐる店があるのでお参りするとその匂いに包まれてしまふのです。この句は昭和十八年の作ですから戦争が最も熾烈な時で焼鳥などは食糧難時代で見たくてもお

目にかゝれなかつた時代で、お詣りをして焼鳥の匂いもしない淋しさを詠んだものでしよう。(没食子に向つて)

此の頃だつたら矢張り焼鳥の店が出てゐるでしような

没食子「さあ、知らんなあ、鮎美「隣やないか (註)没食子は淀勤務、伏見の近辺)

没食子「僕はあんまり出歩かんから……この頃は淀でも焼鳥を賣つてゐます。」

白柳子「伏見の焼鳥はスズメを賣つてゐるんです。」

没食子「淀ではピン焼と云つて一皿六十円で三匹ありますよ。」

白柳子「焼鳥はつぐみがいいのですな。」

鮎美「伏見のは雀でしよう。伏見には雀のお宿があるんですよ。」

白柳子「つぐみの代用品かも知れん。そんなこと云うたら「うちのはつぐみや」と云うて叱られるかも知れん (笑)

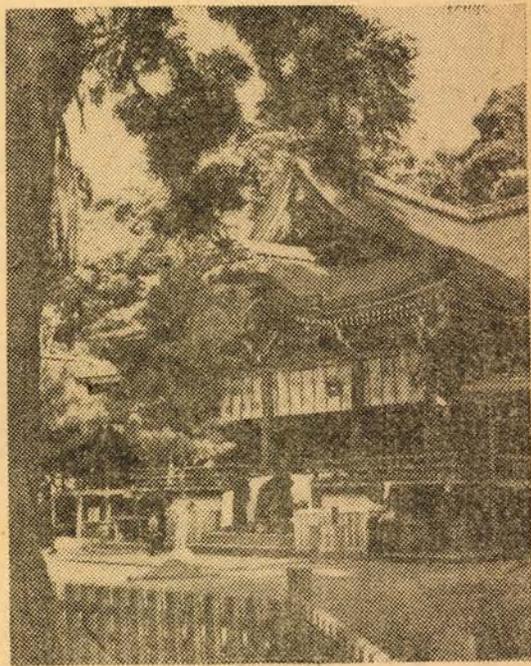
没食子「ピン焼と云うのは雀ですよ。」

なるかと云いますなあ。

鮎美「そんなこと云いますなあ、いや踊りが上手になるんですよ。(笑声)

梨里「雀はその位にして初詣の句を少しあげて頂きましようか。」

没食子「春巢さんの句に父も子も母もマスクの初詣



社神神人は眞享

て初詣をされてゐる、一歩々々の足音が曉を破つて聞えて来ます。

白柳子「お医者さんの春巢さんらしい。皆んなマスクを掛けておられると云う心づかいが、雑沓してゐる初詣とマスクの白さとを、くつきりと浮かべてゐます。」

鮎美「柴さんの句に初詣それから廻るところが

没食子「そりやあよい (笑) 鮎美「葉さんらしい句で、男としてみれば成程々々と、うれしくうなずける句です。葉さんの眼鏡や口髭が浮び、微笑まれている温顔が見える様です。さてそれから何処へ行

かれるのでしよう。君の名は？と聞きたい処です。

白柳子「僕だつたら餅網に引つかゝつてる下戸の禮 (古句)

で廻る処がないのですがなあ鮎美「男だつたらホントの処初詣はお仕着せで、それから本能寺ぢやないですか、どうですか御経験は？」

没食子「僕は初めから本能寺やから (笑声)

白柳子「居ながら本能寺や鮎美「初詣には子供がついて来る。女の子なんか大きなリボンをつけて、その手を引つぱつて歩くのもまたいゝ氣持なものです。婦りに子供は風の子ですからお宮の近所でバイやタコ上げ、羽子板などして遊んでゐるのを見ると、いよいよ正月らしい気分になりますね。」

没食子「僕は寝てるから……白柳子「何や、あくまで寝てるのやな (笑声)

鮎美「初詣から帰つたら中座へ行きます。その頃は今の様に二回興業でなかつたので晝の一時から夜の十時半までで五十五銭だった。(安いなあの声あり) その代り見る処は高い (笑声) 二階の一階後で

没食子「そりやあよい (笑) 鮎美「葉さんらしい句で、男としてみれば成程々々と、うれしくうなずける句です。葉さんの眼鏡や口髭が浮び、微笑まれている温顔が見える様です。さてそれから何処へ行

かれるのでしよう。君の名は？と聞きたい処です。

白柳子「僕だつたら餅網に引つかゝつてる下戸の禮 (古句)

で廻る処がないのですがなあ鮎美「男だつたらホントの処初詣はお仕着せで、それから本能寺ぢやないですか、どうですか御経験は？」

没食子「僕は初めから本能寺やから (笑声)

白柳子「居ながら本能寺や鮎美「初詣には子供がついて来る。女の子なんか大きなリボンをつけて、その手を引つぱつて歩くのもまたいゝ氣持なものです。婦りに子供は風の子ですからお宮の近所でバイやタコ上げ、羽子板などして遊んでゐるのを見ると、いよいよ正月らしい気分になりますね。」



# 川柳第二教室

## 戸田古方

一〇、雪の句について

明けましておめでとうござい  
す。本年も亦御いつしよに柳道に  
はげみたいと思ひます。今年から  
なるべく句主の名をはつきり書い  
てゆきたいと思ひますが如何です  
か。可否御意見を得れば幸せです。  
初雪に質屋へ夏物とかえてく  
る

土江 笑雷

普通文に直しますと  
「初雪がふつたので質屋へいつ  
て夏物を入れて冬物を出してく  
る」  
傍線を引いた「初雪」「質屋」  
「夏物」「冬物」がこの句を形づ  
くつている要素です。冬物といわ  
ず夏物と句の上にあらわしたのは  
雪とか冬とかにさしさわらずよい  
選び方でしょう。テニオハの関係  
ですか、落ちつけないので要素を  
おきかえてみました。

質屋、夏物、初雪の順序にして  
「質屋へ夏物初雪ふつて来た」  
雪降つて我が家もどうやら人  
の家 甲斐 道也  
要素にわけてみますと  
我が家―雪―人の家(ボロ家だ

がとにかく人の住んでいる家)

我が家―人の家―雪

雪―人の家―我が家

人の家―我が家―雪

人の家―雪―我が家

六つの場合が考えられますが、今  
最後の要素の組合せ方をとり上げ  
て、人の家らしうに雪がして  
くれる

「してくる」で我が家を消して  
みました。同じ句主の句に「雪降  
つて松の枝振り見直せり」があり  
ますが相手が無生物の松の枝振り  
ですので我が家というほど身近か  
な切実さを感じません。

雪よ降れたまにや休ませ飲ま  
せたい 小田 柳叟

古句調といえますか、人情味豊か  
なむしろ歌舞伎の「コマの様な感  
じです」。

「働きに出られないくらい雪が降  
つてくれるならば(副文)私は  
私のいゝ人に毎日雪が降るわけ  
でもなく、年に一度か二度の  
ことだから休んでもらつて、ゆ  
つくり好きなお酒でものんでも

らいたい(主文)」

「雪が降れ」が副文、「休ませ飲  
ませたい」が主文「たまにや」は  
主文の副詞

「もつとふね／＼止まずにつも  
れ、雪見酒でもくもうもの」  
もつと色気を出して

「たまの雪だよ、ゆつくりしや  
んせ、主の手じやくでのましや  
せぬ」

「のましやんせ年に一度の雪見  
酒」

何だか評語のようです

「雪見酒買いに女房の裾からげ  
鼻水をすゝり上げ／＼雪見酒

藤井 五茶

面白いが、前の句にくらべるとむ  
くつけきおの子ばかりしか浮んで  
来ません。みみつちい雪見酒です  
ね。

ふんわりと雪はお酒をついで  
くれ 増本 翠露

この句は私の「裾からげ」の句よ  
りもつと詩的です。

美醜みな白で包んだおおらか  
さ 高崎 雄声

「純情の乙女心を雪に見る」  
二句のねらいは同じく雪の美しさ  
です。

「美醜」の句はずばりですが概念  
的で「おおらかさ」の一語にわず  
かに息づきをしているようです。

「純情」の句は前の句程の堅さは  
ないが「純情の乙女」ときてはあ  
まりにもおきまり文句です。

雪の美しさを取扱つた句として次

す。自分では上手に野次つた  
つもりなんですが、野次のの  
んやめてくれ云うて文句を  
云われ、初詣から叱られた  
(笑聲)好きな歌舞伎に行つて  
ねえ

没食子Ⅱ廻る処があり、やな  
梨里Ⅱ初詣と云つたら矢張り  
元旦のお詣りだけを云うので  
しようね。

白柳子Ⅱ歳事記には歳旦のお  
詣りを初詣と云うとしてあり  
ますが最近では電鉄の宣傳や何  
かで五日位まで、或は松の内  
にお詣りすることを初詣と云  
うことにしている様です。そ  
の方が神社も儲かるし(笑聲)

元日は没食子さんの様に寝て  
いる方もあるので三日でも、  
五日でも詣つてもらわんと  
鮎美Ⅱ神さんも商賣気を出し  
て日のべしてますねん。戎さ  
んでもね。

梨里Ⅱ初詣をして何か御利益  
があつたと云う話の一つ……  
鮎美Ⅱこれは豆秋さんの話で  
すが、豆秋さんも何時も没食  
子さんと一緒で寝正月をして  
はりますが、たつた一度初詣  
をした事があるそうです。も  
う十年程も前のことですが早  
朝し神様へお詣りをして境内  
で神様へお供えする青海苔を  
拾つたので、これは今年御

利益があるぞと思つて早速お  
雑煮の中にその青海苔を入れ  
て頂いた。処が頂度その年に  
以前勤めておられた会社が潰  
れたのだそうです(笑聲)

没食子Ⅱこれは御利益があり  
すぎましたね。

白柳子Ⅱ私の近所の方が佳吉  
の初辰さんへ初詣をして、お  
みくじを引いた処、一番の初  
籤が出て、「今年神が助け  
る」とありました。その翌月  
またお詣りしておみくじを引  
いた処、同じ番号のが出たの  
に違ふ文句だつたそうです。

神主さんに聞いたら、正月に  
はそんな文句のみくじはない  
のに不思議だと云う。これは  
本当に神様のなさる業かと非  
常に有難がつていました。が、  
実際に儲けておられますので  
これが御利益かと思ひます。

その正月に引いたおみくじは  
私も見せて貰いましたが、あ  
んなもの一枚や二枚印刷する  
わけには行きませんからね。

鮎美Ⅱ芸人はよく初辰さんへ  
お詣りしますなあ。文樂など  
もね。

白柳子Ⅱ毎月お詣りして、そ  
の度に招き猫を貰つて来る。  
初めは小さな親指位の大きさ  
でそれがたまつたら段々大き  
いのと代えてくれる。

の二句をとり上げてみました。しかし工夫の割にはどつちも理くつがさきに目につくことは「美醜」の句と同様。

雪の白さへ覆つてほしい社会  
愚 増本 翠露

白と悪との対照をきかそうとして  
いるのです。

雪真白汚れをつみおくせる  
伊藤 登

疑問体をつかつたところに新鮮さ  
を感じさせますが、同じ句主の

「芸術祭参加忠臣蔵雪が大変」  
松の廊下に五百万円かゝつたと

か、雪にいくらかつたとか、松  
本幸四郎主演の松竹映画、この映

画を主題とした時事吟ですが、  
「雪が大変」の表現は大変思い切

つたものでしかも妙を得ているよ  
うです。「芸術祭参加忠臣蔵」と

いう漢字ばかりの至つて堅い文字  
をうけとめて決して力不足を感じ  
させません、一応の佳句といえま  
しょう。

また雪になつて雀の弱々し  
永松東岸子

素直な写生の句、雀の弱々しの九  
語が出だしの「また」をたくみに  
うけとめています。この「弱々

し」は俳人にはみつけれられないも  
のでしょう。

雪知らぬ子供に因て凶案だけ  
井門 治義

句主のお国具あたりでは雪が珍ら  
しいのでしよう、それをそのまゝ、

よまれたのでしよう、「凶案だ  
け」が目を引きのですが、はたし

て雪の感じを知らずしてよい凶案  
が出来るかどうか、一寸心配にも

なります。かえつて逆に面白いも  
のが出来たのかもしれないが、

おそらく現実にとりつけた面白い凶  
案にぶつかられたのではないでし  
ようか。とにかくよい句の出来る  
第一歩は忠実に人生と自然を見つ  
めること、見抜くことです。

音をみな吸い取る様に雪が降  
り 徳永 貴美

これは又聴覚の方のたくみな写生  
です、耳の写生は口の写生以上詩  
の領域でしょう。

「吸い取る」がその肝どころにな  
つています。

第二教室研究題  
「チョコレート」  
メ切 一月十五日

発表 三月号誌上予定  
投稿先 豊中市本町三丁目二〇  
一 番地 戸田古方

### 同舟近詠

松山市 前田 伍 健

遣唐使時代へ日本戻りかけ

時の人宿の画帳へ下手な筆

遊説は打倒く〜と水をのみ

馬鹿云つて居れば年寄いたわれ

大阪市 橋本 緑 雨

仮縫をせかしてコース変えて乗り

下積が結構でしたとやめて去ぬ

二十二三ならまだ歳もかくさぬが

峠茶屋一團去つたごみを掃き

相談をしてピクニックのめしにする

長野県、高峰 柳 兒

闇成金ヘデフレの風まとも

稻刈りはみんな車窓へ尻を向け

### 病氣して見て

八木摩太郎

没食子Ⅱ 発達するのやな  
白柳子Ⅱ 清荒神でもそうです  
ね。あそこは一年に一個やか  
ら中々発達しませぬね。  
結美Ⅱ 初辰さんはやつぱり商  
賣気があるね。処で没食子さ  
ん、今年はやつぱり寝正月で  
すか  
没食子Ⅱ いや、巾を上げた分  
へはお詣りします。まあ酒が  
ない様になつてからですな  
(笑声)  
白柳子Ⅱ 本音を吐いたね。  
梨里Ⅱ それではこの辺で……ど  
うも有難うございました。

(梨里筆記)

人間は病の器だ。いつ病氣にな  
るか判らない。病は氣からだと言  
う。兎に角、恐いものだ。命に  
かゝる問題だ。癡つたら、元々だ  
と、つまらないことを云うなア：  
世の中に恐いものに地震、雷  
火事、親父がある。地震と台風  
と、どちらが横綱だ。水爆も、原  
バクも、其頃はハッテ居た。此  
頃水爆や原爆が出来て、勘進元と  
行司を引受けて呉れた。後から出  
てノサバツタもんだ。ビキニの灰  
は、兎に角検査役で四本柱をつ  
とめるらしい。路郎先生御夫妻に  
心配をかけた私は寝て病床にて  
句会にも行けず、長く病臥してい



日ごろの疲れ……  
そんなのないよ  
疲労はメタボリンで  
毎日解消してるだろ！

疲労回復・脚氣に  
**強力メタボリン**

U4 錠・注・無痛注

る柳友の人々に、思いを馳せた。  
壮健な人は幸福だ。月一回の本  
社句会で、顔を並べる丈けでも喜  
ばねばならないと思つた。又、山  
雨楼氏の健筆は病人と思えぬ活躍  
振だどつくづく思つた。  
病床にある人々を慰める最大の  
プレゼントは、面白く編集するこ  
とと、発行を一日でも早くする事  
だと思つた。よい句を待ちこがれ  
ている柳人のベツトへ喜ばす事  
だ。われわれのための、われ／＼  
によるわれ／＼の川柳と……リン  
カーンのような事を、柳翁が言つ  
たか知らない。後で芽をふけ……  
とは云つたが……とも思つた。兎  
に角病氣は親しむものでない……  
親しむものはチロリだと先生の御  
声をする様な氣もした。



# 川柳映画化の 可能と困難

文化映画「川柳」の提唱を説いてゐる、山雨、と云ふ、

戸田古方

三條美紀主演の映画「川柳」と云ふ、

「お、けに」  
「今夜の勘定、あつさり棒引いたげます」  
「あ、あほうな事を」  
「電車買もないなら差し上げます」  
「おつさん」  
「何を泣きなほる」  
「すまん」  
「あんた泣上戸かいな」  
「ボロ服やけんどこれとつといつて」  
「無一文と云うスリルを君知るや」  
豆 秋

先輩山雨楼氏の構想に刺戟されて川柳がどこまで映画になるかならないか考えてみた。

二十年前毎日新聞の「発声映画大日本帝国史脚本」に応募したのが病みつき、「自惚れ」というころ病が押さえても押さえても発作を起しそうになる。

独立プロを興す資力など思いもよらぬこと、商業映画に拾い上げてもらえそうにもない。只シナリオ化を予想しながら思いつくまゝものしてみよう。

山雨楼氏は川柳史の方法で古川柳篇、現代川柳篇を考へていられるが、あまり専門的になりすぎはすぶの素人にはとつきにくからう。私は「川柳入門」とゆゑか、そうゆゑ一篇を先ずおいてそれから川柳史へ入るなら入つた方がよさそうに思へる。由来文化映画は添えもの的なもの、努力の仕甲斐のないものであるから。

「狂犬の眼にまつすぐな道ばかり」

「野良犬」の中に出て来た川柳だなといつてくれる人は何人おるだらう。名画「野良犬」の中で逃走した犯人を追う二人の刑事、古参の方が「君こんな川柳のあるのを知っているかい、あいつは狂犬だ、狂つたやつはきつともどつてくるよ」といふようなことをいつてこの句を引合に出すところがある。画面はどこまでもつづく二本のロールにモンタージュしていった。寡聞にして、これくらいより映画に川柳の出で来たはつきりした例を知らない。しかも私たちは柳人だからおぼえていたもので、そうでなかつたら気づかずに通りすぎしてしまつたことだらう。別に句だけが字幕になつたわけでもなく甚だ印象が薄い。「野良犬」を見た人に尋ねても、少数の注意深い人以外は「あつたかなあ」位がおちだらう。ジャーナリズムがこの川柳のあることを特に宣伝してくれ、ば別だが。名監督黒沢明氏にしてこの程度なのだからどうす

ればおもしろく川柳を表現出来るかは仲々むづかしい問題といわざるを得ない。  
山雨楼氏がまつすぐ川柳史でゆこうといわれる意味はよくわかる。

これをこのまゝ使うのも映画化への一方法ではあるが、最後の句となるとナレーションとして画面外の声でかきせるか、但しは字幕を出してナレーターに読ませるかより方法はなさそうである。偶然飛び出す川柳とちがひ、文化映画「川柳」と銘打つ以上淡い印象に終るとも思えないがこれがきめ手とは考えられぬ。

「うわあツしもたツ」  
「どないしなはつたんだす」  
「やられたツ」  
「やられたて何をだす」  
「財布や」  
「ひえツ、ほな、今あんたと並んで呑んで居た彼奴がやり居つたんかいな」  
「いゝや、人をうたがいがいとうない」  
「……………」  
「わえが悪いのや」  
「えらいツ」  
「……………」  
「あんたのその気性、わたしは惚れました」

思いきつて句に使われている文字を一字ずつか、一くぎりずつに大写到し最後に、一句を再映したらとも思ふが少しひつこすぎはしないか。  
川柳味だけならばカメラとゆゑ道具を通して如何様にも表現出来そうだが、文字になつた川柳の紹介は容易でない。

山雨楼氏の提唱の中に江戸時代の町人が川柳を楽しんでいる描写をしたらといわれるがどうしてあらわすか。会話でするか、書き上げられた句箋か、出来上つた万句合せをもつてくるか、地味な町人の句会の雰囲気は出せそうにもない。トーカーといつても視覚化が成功しなければ会話だけで押せるものではないから。

私は川柳映画化の第一歩はむしろ川柳味の紹介に限る方がうまく行くのではないかと思う。「川柳つてこんなものだ、」から「川柳を作つてみたくてたまらない」よりもつて行きたいものだ。  
こゝで山雨楼氏の提唱を再説した。  
山雨楼氏は筋を立て柳誌、句会、新聞雑誌柳壇、最後にラジオまで吟味して同好者以外に普及力のとぼしいのを嘆いてトーカー映画の手法をかりようとしていられるのである。そして古川柳十数句、現代名句十句を眼と耳から大衆の前に投げ出し、ぶつつけてみようといわれるのである。まことに御もつともな名案だが縁なき衆生に結縁するには川柳の流へ自らの力で自然に融け込む様に仕向け、食欲の出たところへ眼と耳から句を与えてもおそくないように考へる。

そこで次の様な筋書を立ててみた。  
一、映画「野良犬」を見ましたか了解を得て川柳の出でくる部分を再録する。

二、狂犬の眼にまつすぐな道ばかり」とゆゑ句をおぼえていますか句を字幕に押し出して話を発展

させるよりどころにする。

こうした犯罪心理がむしろ普通の穿ちの句より又ジャーナリズムにより誰もの関心をうばつた映画を利用出来れば利用する方がアトラクティブで効果がある。しかも誰でも共感し得る句境だから。

三、人情の機微とゆうものは稀らしいものではなく石ころのようところがつている。この石ころの中から人生のキーポイントに重要な肝どころを見つけてみたいと思いませんか

足でつけている名もない石、下駄の歯にはさまつた名もない石、それはふみかためられて美しい道路を作っていく

四、喜怒哀楽のある人間。喜怒哀楽は慾望にもとづく。慾望の正体を見極めて幸福になりたくはありませんか

喜怒哀楽と表情をかえてゆく一つの顔。漫画であつてもかまわない。喜楽は天使の顔にダブル、怒哀は悪魔の顔にダブルさらに天使の手、悪魔のいやらしい手がふるえる。しかもそれが同一人なのである。

五、喜怒哀楽は外にあらわれてうたを唄い、手足をふりうごかしておどりとなります。そんな経験はありませんか

喜楽の唄とおどりと怒哀の唄とおどりがカッパツバツクシダブル六、日本人にもつと適したりリズムは五七調、七五調、どうです皆

さんの思いを七五、五七で調べてみませんか、どいつでもヤツトン節でもデツカンショでも。

象徴的な七つのかたまりと五つのかたまりが急速なまた緩慢なテンポにつて踊りまわる。七、段々型を短かくつづめる程印象的で効果的です。五七五に凝縮してみても

沢山あつた七のかたまりと五のかたまりは最後に大きくなつた五、七、五の三集團のみを残して消えてしまふ。

これが川柳の型だから、この五つのかわりに五音、七つのかわりに七音を入れて句にかえてみてもよい。その句については大いに研究を要することだが

ひとにぎり あゝじんせい は わにしかず など如何。そして、あらためて一ト握りあゝ人生は和に如かず

と漢字まじりにあらためる。八、けんか口論をする前に相手を批判してみる余裕がほしいとは思いませんか。

忠臣蔵の松の廊下の刃傷のシーンが使えれば使つても面白いだろう。

路郎先生は句を作つていと肚がたつても立たぬとよくいわれたが適当に演出することも出来るだろう。

九、相手とともに自分をも反省してみてもどうですか 鏡にうつる自分の顔を瞬間鬼に

変えてみるのも一つのやり方

十、批判といひ反省とゆうのも、ものゝ真相をつかむことですが。ルールがはずれてくるそこへ玩具の電車が走つて来てのり上げてひつくりかえる。

十一、そうしたところにはほんとの川柳があるのです。 「一ト握」の句をもう一度字幕に押し出して奈良三月堂月光の世にも美しい合掌でももつて来て

十二、しかも手近にころがつている材料で手持ちの道具即ち知識能力で出来るのですが

これはほんとにメモにすぎないもので、川柳入門十二章なぞゆうにはお粗末すぎる。ただ日頃承わつている路郎先生の「川柳とは七音字中心の人間陶治の詩である」といわれる川柳の定義をシナリオ化してみようとしたにすぎない。出来るならば劇映画として組立ててみたいのだが私には全くその能力も経験もないので甚だコツ／＼した論文が演説かただしは講義のような味気ないものになつて

いる。もつともつとよい視覚化、よい聴覚化をして大衆の誰もが飛びついてくるものになければならないと思う。そうしたものの出来るのが文化映画「川柳」の序章となるのだ。

柳人にして劇作家小畑自由朗氏

などの御智恵は是非とも拝借しなければならぬだろう、何にしても衆知が必要で川柳界あけての協力によつて出来る大事業である。

川柳界のみにとどまらず

一、映画人を柳人化する運動、第二第三の「野良犬」を作つてもらつてジャーナリズムの注目をあびねばならない。

二、現場の映画人のみでなく映画企業の主脳の中からも柳人を誘い出さねばならないチャップリンなど立派な川柳人だといつも思つている。映画企業家の中にすでに川柳精神は立派に養育し成長していること、思うから柳人化も難事でない。

三、直接文化映画「川柳」に協力してくれる映画人を探し求めること。

四、川柳人と映画人の交流を盛んにして川柳人ももつと映画を作る気になつて勉強すること

以上蛇足乍ら、あの真面目な柳界の至宝福田山雨楼氏の提唱が只単なる夢に終らないために附加えずにいられなかつた。

一九二九、文化の日に

川柳雑誌社特製

投句用 柳 箋

一冊(五十枚綴)三〇円

送料 八円

謹賀新春

川柳雑誌社

淀川支部

大阪市東淀川区三津 屋北通四ノ二九

若本 多久志

鈴木 天貪

木村 水堂

西森 花村

坂田 真一

志水 礼三

早川 野甫

岡部 癸中

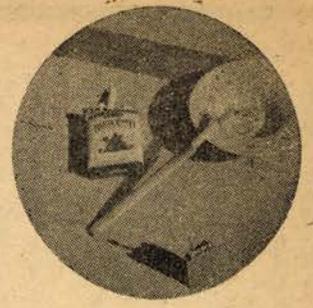
小林 文平

武部 若菜

武部 香林

川柳 八代支部

八代市大手町 八代地方事務所前



# 川柳は社会人を相手に

— 東京柳壇の近況を語りつつ —

## 品川陣居

今年未(ひつじ)年である——

ということは明治二十八年に生れた者にとつて還暦になるのである。広辞林には、齡六十一歳の稱、暦の上に六十年にて干支一周して元を復するよりいふ。ほんけがえり。とある。また華用ともいうが、それは華の字を分てば六十一となる、よつて六十一歳の義とす。范成大詩「視我剗周——子、謝人深勸玉東西」と字源に出ている。

東京柳壇では、今年還暦に当るのは、古谷盈光・山路星文洞・品川陣居・富士野鞍馬の四名である。そこでわたくしを除いた四氏にからめて東京柳壇の生立(おいたち)ないし現況を考えてみたい。盈光子は三浦太郎九子とともに川上三太郎先生の股肱であるといつたら当りさわらないであらう。速くは矢野錦浪門で研鑽した人で、柳歴はおそらく三十年、四十年になるのではないか。句姿はすらりとし、含蓄するところ深く、一流中の一流であり、かつて前田雀

郎先生をして東部柳壇第一人者の折紙をつけしめた。堅実質素な生活面がそのまゝ十七字を成すのである。でしやばらず、自己を強調せずひたすら作品一本で行くの風である。

山路星文洞子は、その雅名を阪井久良俊翁に授けられた。柳樽出版書舖星運堂にゆかりをもととするのである。住居地東京大東区催での囑託川柳選者であり、かつて川柳倶楽部の事務所を自宅においていた。これまた句姿は庶民の川柳性を代表するもので、表現の妙、簡たるに足るのである。

富士野鞍馬先生は、関東においてよりも関西において知名であり、その考証川柳学たるや本誌でも馴染みのものである。とならべてくると品川陣居のごときは柳歴こそ四十年近くなるが傍観者の境を出ない野次馬である。塚越迷亭先輩に素人(しろろ)と川柳批評家の名をもらひ、好きて書き流す雑文は、毎々本誌幹部、愛読者諸君に御迷惑をかけて

いるのである。いま東京柳壇を形成している三つの老舗(しにせ)は、「きやり」「川柳研究」「丹若会」である。きやりは村田周魚先生主幹で、毎月の例会には八十名前後の出席がある。川柳研究は川上三太郎先生主幹で毎月例会には三十五名以上の出席者、丹若(たんじやく)会は前田雀郎先生主幹で、出席者は川柳研究社例会に伯仲している。というところに関西—大阪方、神戸方に比し遜色があるようだ。しかも出席者の中には三者共通した顔振れがあるのだから、大阪方、神戸方のように特定吟社にだけ出席するという「掟」がない。

この三者のほかには有力なものには渋谷川柳句会(田中月陽氏居)、川柳かつしか(関根木九氏居)、白帆吟社(山本卓三太氏居の他)、台東川柳人連盟(台東区役所楼上)、川柳学校(十四世根岸川柳氏主宰)、東京川柳会(高峯茶の丸氏宅)等がある。

この中には白帆吟社、渋谷川柳句会、台東川柳人連盟が盛会である。ところが前記三大吟社でもそうだが、議会でいへばこれら小会派ともいへばそれぞれ句会には共通した出席者——川柳が好きで好きで堪らないという川柳家が路の遠きをいとわず出席するという風で、選者もその時々々々「顔」で決まる(宿題——そちらの兼題選者はあらかじめ予告されるが)ので、それぞれ吟社の特色というものは見られないが、多少は主催者によつて「定員」はあるようだ。

この外に、年二回『京浜川柳大会』が、春は横浜で、秋は東京という風に交互に催される。出席率は、この秋の東京大会では総出席者百四十名の内、四十名ぐらい横浜方とあつて少々アンバランスだが対抗試合では横浜方必ずしも弱勢とは限らないようだ。この京浜大会の外に大きなものとしては東京川柳作家連合会(東川連)の大会が渋谷区役所の楼上で年一回あり、都知事賞、区長賞その他賞状が出る。東京の川柳家の最近の句会での作品を少しぬいてみる。

- 川柳丹若会
- 川柳丹若会
- 石をもて追はれる峠振
- 向かす
- 川柳きやり
- 人民は生かしてもらふ
- やうに生き
- 母の手になると胡瓜も
- まはし切り
- 母に似た十人なみが娘
- に不服
- 夕方の虹夏がれの身を
- 忘れ
- 川柳白帆
- 愛し得て悔いることなき
- 灯に坐る
- かうしてはゐられぬ意
- 慾雨を觸き
- 良い嫁の次男へ母は泊
- りがけ
- 渋谷川柳
- ステッキの指さすとこ
- ろダムになり
- 鉄骨は明日の渋谷を組
- み立てる
- 靴脱いでさつき世話
- も今日非番
- ハイヒールそのまゝ廻
- るお花の日
- 心足る靴なり花をさけ
- てふむ
- 遊子
- 高久
- 純喜
- 遊子
- 青蛾
- 芳浪
- 周魚
- 眼一
- 突風
- 猫三
- 盈光
- 三皇子
- 瑤天
- 丸
- どくろ
- 遊子

川柳かつしか  
貰いた職小さくも我が  
家の灯

木九

シャンドリヤ偽善は去  
れと灯蛾狂ふ

北斗

園丁に夏のベンギン衰  
れなり

茶夢

これらの作品は、いま手許に資  
料が少ないので、東京川柳家の代  
表作品とはいえないが、それでも  
東京風を察してもらおう一助に  
なるろう。

そこでぼく想うのだが、川柳と  
いう名の庶民芸術は、ただ長い間  
川柳をやっている」という川柳

人だけのものであろうかというこ  
とである。

今日の毎日新聞の「憂楽帳」に

「政治家のための文章論」という短  
文があつて——講座ものや説手は  
やりの出版界に、文章論も出て受  
けているのは、長い間この種のも  
のが出なかつたためであらう。た  
だし多くは作家たちの手になる文  
章論で文学青年相手のように見え  
けられる。修辭学が影をひそめ、  
意味論などにおきかえられようと  
しているが、今日では文学以外の  
文章論も大いに必要だらう。河出  
の「文章講座」で実用文一卷を加

ものかと相手を見入つていた。  
偶々前日にあつた筆答試問中の  
問題を拾つて第一矢を投げる。肋  
膜炎で瀰溜液が多量になればどの  
位穿刺排除するか。これには僅か  
に五坪というものもあるれば、膿  
に一杯などと氣楽相にうそぶく  
のがある。それでは幾容量かと畳み  
かけると黙して声のをむと云つた  
調子だ。どうやらこれはほんの少  
量を探る場合の所云試験的穿刺を  
見た嘗ての見学や、あり合せの膿  
の春の時とは違つ  
て、秋はその落武  
者か、病気で受験  
の機会を見送つた  
人達を相手だから  
試験風景も何とな  
く低調である。外  
科側からと内科側からの二人の委  
員が受験者一人を呼び入れてテス  
トする仕組だが今日も苦提心を発  
揮して何とか一人でも多く救えん

えているのはこの点で意味があ  
る、現在、時代感覺を身につけ、  
正しい意味を正しく相手にわか  
せる必要のあるのは何も文学者だ  
けに限らない。いや、むしろ政治  
家、官僚、司法官、経営者たちこ  
そそれを望みたいのだ。

新党準備会の声明、各政党の綱  
領、議會での証言、知事選挙の放  
送など余りに時代離れしている。  
調子だけはよくても内容は全く空  
疎、胸に訴えるものは何もない。  
文筆家はよろしく政治家に文章を  
教えてやるべきだ。

爪先で立つてゆらくするのを見  
せたりするのがいて検査目的の意  
義さえ解らぬような笑止に堪えぬ  
のがいた。  
由来日本人には勇往果敢などと  
称して出たと勝負で勝を制した  
がる癖がある。奇襲効を奏するこ  
ともあるにはあるが、といつて確  
率の少いのは云うまでもない。自  
動車に乗つていると時に異様な音  
や臭がしたりすることがある。構  
わんのかと訊いてやるとなアに  
大丈夫と碌さまその因を探りもし  
ないでその儘走らす運転手が大方  
である。「信するよりも確かめよ」  
といふたいことが吾々の日常に、  
周囲に如何に多いことかと思つた  
のであるがこの受験者もまさしくそ  
れだ。いつの日もどんな仕事も先  
ず謙虚に、ゲット ザ フアクト  
であつてほしい。事実を捕え、事  
象を直視し正しいデーターを得て

——というのである。誰でも  
氣付いていふことでは、そうし  
たものに悪口のはかに言わなかつ  
た在来の仕来りに一本釘をさした  
ことになつて面白いのだが、川柳  
にも案外そうした冷淡だつた面が  
ありはしないか。川柳家が川柳家  
だけを相手にして物を言つていた  
のが昨日まで——今日もなお——  
のセンスであつた。政治家に俳句  
を作る(と自称している)者は若  
干あるし、昔は大養木堂なども味  
のある句を作つていた。政治家は  
かりでなく、ぼくに言わせれば文

始めてそこに優れた企画が生れ健  
かな成長が期待されるに違ひない  
のだ。  
こんなことを考へていた私はい  
つか相手の受験者に憐憫を覚え出  
した。相手ばかりも責められぬ。  
教える側にも罪がある。貧い答も  
畢竟、過誤にすぎぬと宥していく  
中に最後の一人が登場した。彼は  
今迄に何度も落ちたらしい相当の  
年輩者で質問毎に身振りよろしく  
何とか云いくるめんものとしきり  
に饒舌を振うのだが云えば云う程  
愈々貧困さを露わす始末だ。それ  
でいて帰り際には何分、諭をとつ  
ていますのでよろしくと懇懇な挨拶  
だけは忘れなかつた。彼が室を  
出た途端期せずして二人の委員は  
俄かに解放された気がしたが間も  
なくDと嚴肅に記録した。もとよ  
りこれはA、B、C、Dの最下位  
でどうにも合格圏内に入り難い辛

壇人にも川柳を作つてもらいた  
い。現に久保田万太郎氏などの句  
風は川柳に近く、人事句が多いの  
である。

びつたりとふすま締めあり  
ほととぎす

川柳家は、もつと川柳誌の粋を  
出て(新聞やラジオもマス・コミ  
ユニケーションとして川柳に着眼  
しているが)社会人向きの「川柳  
作法」でも書いて大いに働きかけ  
たいのである。まずそらうらもの  
、最適任者はお世辞でなく本誌主  
宰の麻生路郎先生であらう。

い採点なのだが全く思い余つた故  
とでも云えよう。こういふ世馴れ  
た男に限つて逞しい生活力を示す  
には違ひないがどこからともなく  
私の心頭に悪貨は良貨を駆逐する  
ぞと云つた囁きが聞こえ始めて到  
頭Dと踏み切つたのであつた。  
音高くピアノの線の切  
れた音  
世故なれぬそが魅力  
としらぬ君 同  
童心にかえるホルモン 同  
ないものか 同  
正月が又候近づく。流れる月に  
今一つ馬蹄を加えることだが春來  
りなばげに自ら若草の如く伸び花  
の如く開かんかなである。まこと  
私の年頭感に來る年も素直さ、純  
真さを失なわぬことと今から仕入  
れておきたい。  
(筆者は大坂警察病院長)

### Dとつた話 井上湧三

厚生省の委嘱でX地での医師国  
家試験に出かけた時のことであ  
る。秋空一碧の下といえは快適そ  
のものようだが試験場の空氣は  
いずこも同じで受  
験者にとつて大凡  
これほど重苦しい  
ものはあるまい。

試験は毎年春秋の  
二回に行われるの  
だが大学卒業直後  
の春の時とは違つ  
て、秋はその落武  
者か、病気で受験  
の機会を見送つた  
人達を相手だから  
試験風景も何とな  
く低調である。外  
科側からと内科側からの二人の委  
員が受験者一人を呼び入れてテス  
トする仕組だが今日も苦提心を発  
揮して何とか一人でも多く救えん

厚生省の委嘱でX地での医師国  
家試験に出かけた時のことであ  
る。秋空一碧の下といえは快適そ  
のものようだが試験場の空氣は  
いずこも同じで受  
験者にとつて大凡  
これほど重苦しい  
ものはあるまい。

ものかと相手を見入つていた。  
偶々前日にあつた筆答試問中の  
問題を拾つて第一矢を投げる。肋  
膜炎で瀰溜液が多量になればどの  
位穿刺排除するか。これには僅か  
に五坪というものもあるれば、膿  
に一杯などと氣楽相にうそぶく  
のがある。それでは幾容量かと畳み  
かけると黙して声のをむと云つた  
調子だ。どうやらこれはほんの少  
量を探る場合の所云試験的穿刺を  
見た嘗ての見学や、あり合せの膿  
の春の時とは違つ  
て、秋はその落武  
者か、病気で受験  
の機会を見送つた  
人達を相手だから  
試験風景も何とな  
く低調である。外  
科側からと内科側からの二人の委  
員が受験者一人を呼び入れてテス  
トする仕組だが今日も苦提心を発  
揮して何とか一人でも多く救えん

爪先で立つてゆらくするのを見  
せたりするのがいて検査目的の意  
義さえ解らぬような笑止に堪えぬ  
のがいた。  
由来日本人には勇往果敢などと  
称して出たと勝負で勝を制した  
がる癖がある。奇襲効を奏するこ  
ともあるにはあるが、といつて確  
率の少いのは云うまでもない。自  
動車に乗つていると時に異様な音  
や臭がしたりすることがある。構  
わんのかと訊いてやるとなアに  
大丈夫と碌さまその因を探りもし  
ないでその儘走らす運転手が大方  
である。「信するよりも確かめよ」  
といふたいことが吾々の日常に、  
周囲に如何に多いことかと思つた  
のであるがこの受験者もまさしくそ  
れだ。いつの日もどんな仕事も先  
ず謙虚に、ゲット ザ フアクト  
であつてほしい。事実を捕え、事  
象を直視し正しいデーターを得て

始めてそこに優れた企画が生れ健  
かな成長が期待されるに違ひない  
のだ。  
こんなことを考へていた私はい  
つか相手の受験者に憐憫を覚え出  
した。相手ばかりも責められぬ。  
教える側にも罪がある。貧い答も  
畢竟、過誤にすぎぬと宥していく  
中に最後の一人が登場した。彼は  
今迄に何度も落ちたらしい相当の  
年輩者で質問毎に身振りよろしく  
何とか云いくるめんものとしきり  
に饒舌を振うのだが云えば云う程  
愈々貧困さを露わす始末だ。それ  
でいて帰り際には何分、諭をとつ  
ていますのでよろしくと懇懇な挨拶  
だけは忘れなかつた。彼が室を  
出た途端期せずして二人の委員は  
俄かに解放された気がしたが間も  
なくDと嚴肅に記録した。もとよ  
りこれはA、B、C、Dの最下位  
でどうにも合格圏内に入り難い辛

壇人にも川柳を作つてもらいた  
い。現に久保田万太郎氏などの句  
風は川柳に近く、人事句が多いの  
である。  
びつたりとふすま締めあり  
ほととぎす  
川柳家は、もつと川柳誌の粋を  
出て(新聞やラジオもマス・コミ  
ユニケーションとして川柳に着眼  
しているが)社会人向きの「川柳  
作法」でも書いて大いに働きかけ  
たいのである。まずそらうらもの  
、最適任者はお世辞でなく本誌主  
宰の麻生路郎先生であらう。



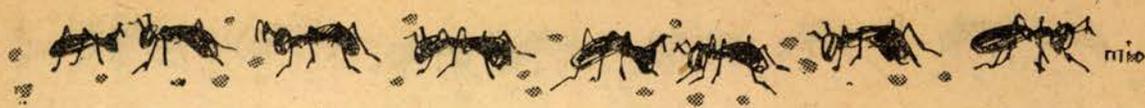
### 麻生路郎選 北川春巢選

青春に前期と後期があるそうな 大阪市 不二田三夫  
 便箋の八行までは嘘で埋め 同  
 慰謝料はいくら貰える相談欄 同  
 警棒に比し警官が小さ過ぎ 同  
 国乱れもう忠臣が出る時分 同  
 湯気の立つ鰻井株式会社製 大阪市 早川野甫  
 長壽法すべて無視していて長壽 同  
 鯉に鉄をやるごとく処女捧げたり 同  
 バスよりも安い市電でゆく新地 同  
 秋刀魚の歌唄うてロマンの煙を 貝塚市 福島丁丙  
 酒焼けも逞し社用族という 同  
 平和祈願して鳩のふんつけてくる 同  
 城の建つ話デフレの風の中 同  
 轉勤をして公になつた恋 高田市 戸田悦子  
 ピント合わすまでお預けをされる鹿 同  
 雨好きな姉に消えない過去があり 同  
 ふだん着の勇気をほめるPTA 同  
 十年の起伏支那語でめしが食え 出雲市 原章坊

十二月口で呼吸する日が続き 同  
 冬の蠅ヘリコプターのやうに飛び 同  
 想像にまかせ新婚笑うだけ 同  
 気短かな親父にさせた金語り 出雲市 久家代仕男  
 全快に空気が旨い朝の庭 同  
 科学とは別に佛を信じて居 同  
 金持つておいでと泳ぐバルーン 同  
 善人の相で儲けの下手なこと 米子市 勝田正郎  
 不渡りを出すまで派手な宣傳車 同  
 重役の名刺出し合う赤切符 同  
 焼石に水程借りる札を言い 同  
 高校の帽子を野良へまでかぶり 貝塚市 河楊梵鐘  
 勘太郎姿の焼増たのんどき 同  
 活花のお師匠はんも踊らはり 同  
 倒産寸前見せぬ宣傳派手にやり 岡山縣 大町別城  
 新廳舎落成祝の次が減首 同  
 裏町へ来て寄附帳が早うなり 同  
 自轉車のリズムに合わせお富さん 津賀縣 土守トシ坊  
 上女中だつたと仲人納める氣 同  
 孫達の爲に杉の木植えに行き 同  
 猫二匹いて食卓の落ちつかず 大阪市 竹内花代子  
 糸を巻く手もあれたまゝ世帯 同  
 袖口もほころび家計簿も赤 同  
 クラシッポゴールチェアを追ひ出され 貝塚市 小島さぎす  
 来てもし来るなど退院祝われる 同  
 肺活量負けすぎらいが二度も吹き 同

## 謹賀新春

前田 伍健 <small>松山市真砂町二一</small>	橋本 緑雨 <small>大阪市東住吉区平野西之町八三</small>	長野県須坂局区内太子町	高 峰 柳 兒	須崎 豆 秋 <small>大阪市阿倍野区旭町三丁目一四</small>	兵庫県水上郡沼貫村字小野	戸 倉 普 天	逸 見 灯 竿 <small>岡山県阿哲郡本郷村</small>	杉 谷 湖 山 <small>鳥取市職人町</small>	和歌山市今福北部二二八	秋 月 宏 方	大阪市南区北桃谷町七一	川 村 伊 知 呂	大阪市東淀川区国次町四七九	金 泉 万 樂	岡山県英田郡美作町大字北山	岡 田 夜 潮	山 本 葉 光 <small>阿倍野局区内王子町三丁目一(電)四〇〇八</small>
----------------------------------	--	-------------	---------	---	--------------	---------	-------------------------------------	----------------------------------	-------------	---------	-------------	-----------	---------------	---------	---------------	---------	--



空からのピラも踏まれる十二月 岡山市 宗高ハツ茶  
 二人乗り入妻の手がこそばゆく 同  
 もう喧嘩したと新婚嬉しそ 同  
 本棚の思想書学生だつた頃 京都市 坂野壽利庵  
 悪人になれず自衛隊志願 同  
 東奔西走とは放送劇の恋 同  
 何の病氣か布教師の出入 大阪市 藤村 梨花  
 肩に散るいちようさし舞う如く 同  
 整形手術造花の神をあきれさせ 同  
 恋人がいるのに嫁けへんか 大阪府 石山ひさみ  
 ビヤ樽のようなお腹で捨てられて 同  
 貰うてから八頭身が鼻につき 同  
 ゲームセツトダイヤルす 松岡市 萬濃 修  
 日本敗れずなどと哀しき白晝夢 同  
 徳な人やなど鈍感見送られ 同  
 金で済む事と分つてゐる辛さ 四宮市 小浜 牧人  
 焼飯と映画で楽しかつた妻 同  
 色に酔い香に酔い菊花コンクール 同  
 値切る事だけは姑がたたず 大阪市 金井 文秋  
 禁酒までした創業の気がゆるみ 同  
 四本立やつぱりみんな見て帰り 同  
 商魂は人の涙も映画にし 美穂市 安平次弘道  
 算盤の様な男で恋もなく 同  
 オーバーを着て八月の手形書き 同  
 自轉車の手入れをすれば雨が降り 愛媛縣 藤田 博人  
 云うて気が晴れる愚痴なら聴 同

夜業する妻が一番妻らしく 同  
 ダイヤルを 岡山縣 藤田 美雪  
 はるんと来れば妻子のある男 同  
 アベックへ浜の小石がけとばされ 同  
 手洗の下で金魚の伸のよさ 岡山縣 岡 一門  
 写真では姑も大事にします顔 同  
 愛妻家雄蜂のようによく動き 同  
 大型のバスもお袋小さく乗り 西宮市 東浜 成詩  
 告白へちと自惚れた鼻の向き 同  
 口ずさむ事多し初恋へ灯がともり 同  
 齒も腰も抜けて顧問の席に就き 今治市 長野 文庫  
 牛乳屋化粧用とは知らぬなり 同  
 年五十陵る教育容認す 同  
 くやしきは戦犯名簿にないあなた 廣島縣 高島 玉兎  
 街録のマイクへ御意見持ち合せ 同  
 糸屑を取つて頼みに念を押し 同  
 給料は遅配重役家が建ち 松江市 勝谷山川兒  
 まあ坐れと云われ陳情通りそう 同  
 事前運動死亡廣告に目を通し 同  
 失恋をしてから休日もてあまし 天理市 菱田 満秋  
 重点をカロリーにおき味が落ち 同  
 会議もう止めよう芸妓そろつてる 同  
 人形展彼女に似てる顔があり 大阪市 三好 澄泉  
 奉賀帳ますライバルの名を探し 同  
 酔いたし怖し肝を病む父の酒 同  
 どこでどう喰う気か学士と出来 吹田市 梶川 蘇堂

石田 沐天	大阪市阿倍野区阪南町西二ノ三三
土守 トン坊	滋賀県高島郡海津
岩田 十三楼	福岡市箱崎茶屋小路電東四四一五
阿倍野区旭町三ノ一四須崎方	川柳雜誌社阿倍野支部
京都市上京区大宮釈迦谷	池 沢 白 翁
長野 文 庫	今治市神明町一〇〇
大阪市	不二田 一三夫
福 田 丁 路	高槻市郡家新町六五一
南 山 光 男	佐賀市水ヶ江町郵便局裏
川維大原支部	川維大原支部
諷 柳 会	岡山県英田郡大原町
川維大聖寺支部一同	石川県大聖寺局区内法ヶ坊一四番地
川柳雜誌社 木次支部	藤 井 明 朗
島根県木次町	川維赤坂支部
政 田 大 介	岡山県赤磐郡赤坂町



その中で父のカメラが時代めき  
ユーマも少しは判るエゴイスト  
足よりも背中の痛い觀光車大阪市  
山川 阿茶

寂光院

こせこせと言われて草履拜観し  
株だけの汀の櫻みてかえり  
咳一つ癒せず貝塚市にいて医官なり  
阿部かつみ

さまぐな夢さまさまな寝息たて  
泌尿科米子市に居る看護婦の綺麗すぎ  
同 同

盃の祝入管も出る故郷  
松本 舍人

結ばれて菊もほゝえむ秋の部屋  
同 同

先生を慕う心の花が好き岡山縣  
深山 ゆり

逆境が祈りの愛を信じ切り  
同 同

泣いて勝つ味を下の子もう学び和歌山縣  
深田やよい

へツプバーン菊活けた日のし岡山縣  
同 同

盲腸の傷新婚の宿でばれ兵庫縣  
吉原 紅月

イヤリング村の噂は気にかけず  
同 同

炊事から妻は濡手でカメラへ来下關市  
岡 藤四郎

新米のドブの所望をする祭  
同 同

一荷五百円の芋の重さと老農夫愛媛縣  
村上 旭堂

夫婦げんかをしては近所に飲ま奈良市て居  
同 同

悪友へ妻は社交として笑い  
絹下 南天

鉄柱の様に父の座にいる我が家  
同 同

考えに沈むを母は恋と知り茨城県  
福永 凡八

告白が一日延びになる弱身  
同 同

未帰還の門札濡れたままで除夜米子市  
須藤 鉄平

御記念に一筆書かせるのも社交  
同 同

單線の秋どの駅も柿をむき愛知縣  
岩川 寛虚

待人へ電光ニユースは繰返し  
同 同

子の預金菓子代べつにまたとられ大阪市  
清水 望峰

カーテンを引オーストラリアてゴールの子守唄  
同 同

編みあげて逢う日を女胸にかき大阪市  
板東千代美

若柳と藤間ゆすらぬ恋をもち  
同 同

言訳がきれいに言えてフト淋し岡山縣  
梶尾 節子

就職へ月賦の服屋がもみ手する  
同 同

法隆寺から竜田を廻りて  
同 同

屋根互見る眼がほしい法隆寺高田市  
岩垣日本村

龍田川秋のゴモクを焼く煙  
同 同

末端は補助を目当に仕事をし岡山縣  
国富 直人

風呂の湯があふれる勤勞感謝の日  
同 同

アベツクが去りルンバが来て坐り高砂市  
藤田 和留

世渡りは綺麗な嘘を繰返し  
同 同

ウインドは親爺の趣味の菊を入れ福岡市  
岩田十三楼

家族皆無口な母にたよりきり  
同 同

要点に触れると女笑うだけ岡山縣  
内田 秀章

アルバイト就職よりも狭き門  
同 同

絶景へ女の姿入れて撮り出雲市  
川端 柳風

しつかりと頼んで友は酔いつぶれ  
同 同

法隆寺落慶  
同 同

いかるがの里は眞つ赤に暮れて滋賀縣  
久保 和友

謹賀新春

武部 香林  
武部 若菜  
大阪市東淀川区三津  
屋北通四ノ二九

西尾 栗

大阪市南区西賑町三〇  
電話 南〇五九六三番

菊沢 小松園

大阪市阿倍野区王子  
町三丁目三四番地

大坂 形水

大阪市東区糸屋町一

川雜堺支部

八木 摩天郎

堺市九間町山ノ口

長野 井蛙

宇部市港町一丁目  
宇部鉄道職員会館



失業の身に晴天が続き過ぎ  
無理な恋あきらめてより熟睡す 貝塚市 同 鈴木すす彦  
都会にも表情があり御堂筋 貝塚市 同 小田 柳叟  
紅燈の回顧ばかり社長手記 貝塚市 同 柿原おかき  
寮庭の紅葉の葉在る頁 貝塚市 同 永吉 喜好  
年賀状盆には来いと故郷の母 貝塚市 同 寺尾 一臍  
病院で選挙権もつ年となり 貝塚市 同 仲どんたく  
バリカンを持って子供等ゆすり 貝塚市 同 西本 保夫  
内職の妻に買物かごをさげ 貝塚市 同 小野花園子  
誘惑を逃げ切つた瞳に菊の花 西大寺市 同 大塚美能留  
歌麿の絵も哭いている片時雨 貝塚市 同 竹原 雲平  
アメ中を見て李女史に旗を振り 貝塚市 同 有友 玲羊  
重役も叱られて居るベッドバス 大阪府 同 南部ひでを  
顔の利くのが現像頼まれる 大阪府 同 西本 保夫  
カンニング笑つて済ます回顧談 同 同 小野花園子  
特價品大和撫子勇ましい 同 同 大塚美能留  
寄り添えば自動シャッター果て音 同 同 竹原 雲平  
先生が稻を刈つてた子のニュース 同 同 有友 玲羊  
水害の稻へ雀も寄り付かず 同 同 南部ひでを  
平和日本二つの世界の雨が降る 同 同 西本 保夫  
賀へとち氏古稀 同 同 小野花園子  
その気骨七十年の濤を越え 同 同 大塚美能留  
道草の子へ帰れ〜と影がのび 高知市 同 有友 玲羊  
囲碁ほどの意地あつてほしい妻 同 同 南部ひでを  
薄化粧ほつをついてみとうなり 同 同 西本 保夫  
仁丹をふくんでちびたペンを変え 同 同 小野花園子

ケロリ効くくすり放送聞いて病み 大阪府 木村 十悟  
妻一人肥える秋なり薬瓶 同 同 伊藤とみお  
針のかす算えフトンが出来上り 岐阜縣 同 淵川 秀敏  
應援の太鼓を憎い音に聞き 同 同 加藤 向水  
残業の月地下足袋へ美しい 八代市 同 津田 千舟  
日曜日妻の指図の大工する 同 同 藤井 五茶  
押賣を去せば税吏やつて来る 新居濱市 同 同 銀永 晶平  
料理講習帰ればサンマ焼いて居り 同 同 同 同  
ヒロインも胸を病んでる慰問劇 貝塚市 同 同 同 同  
二号さん用のアパート出来上り 同 同 同 同 同  
セレナーデ夫婦げんかに切られ 自敷市 同 同 同 同  
流行を減食してまで着て歩き 同 同 同 同 同  
松茸が寺から里へ配られる 奈良市 同 同 同 同

新党樹立  
去るものは追わずに首相落日なり 下關市 同 山田伊三男  
家計簿のどうかなるうに腹を立て 同 同 半田 夏生  
産制を知らぬ姑は不安がり 同 同 前里 里奴  
長病みへ神の道説く便り来る 大阪府 同 同 同 同  
安靜を知つてる蠅が飛び廻り 同 同 同 同 同  
色街の裏にボツツリ質屋の灯 西宮市 同 同 同 同  
迷惑も掛けずに惜い親友は逝き 同 同 同 同 同  
中小企業ですとボトナス言わぬ 西條市 同 同 同 同  
失業のきれいなつた掌が淋し 同 同 同 同 同  
選挙より依の数が気にかゝり 倉吉市 同 同 同 同  
ハイヒールよくぞ一家をさへえ 同 同 同 同 同  
松茸の椀に豆腐が巾を取り 群馬縣 同 同 同 同

木村 孤浪  
平塚市馬入二九〇九

大西 窓迷  
高知市追手筋五七

角一川 柳白鷺会  
大阪府福島区鷺洲中  
二丁目五番地  
角一ゴム株式会社内  
福島 六五四一―五

明和病院  
川柳 青蛙会  
西宮市鳴尾町宮本五〇

木口 賀峰  
大阪市東淀川区西中  
島町五八一

帝化川 柳会  
深見 雅堂 川端 乱酔  
松下京一樓 角谷 三平  
谷 一平 川島葉乙女  
清水 一朗 佐野 白水  
和田 寛峰 外一同



下積の若さが振つたストの旗  
酌ぐ手つき過去のありゆか人に見え 玉野市  
着飾つて妻が出て行くクラス会  
掃除婦の山田五十鈴に似ているが 金澤市  
内職賃百万円の夢も買う  
公園とは名のみ人道地におちて 大阪府  
どの懸垂幕を見ても二ヶ月分ば  
嫁取りに姉は格下げして賣られ 岡山縣  
再軍備恩給組は雙手上げ  
相模湖遭難  
しつけ糸取つて空しい子に着せる 下關市  
貧しさは張物板のすべり台  
歎肩にデフレの底を話題にし 岡山縣  
嫁の座の芋にかぶれた妻の指  
盆栽をいたわる気持もある頑固 下關市  
若いものゝ話もきいていゝ社長  
エスカレーター尻の破れが気になり 岡山縣  
アラモード予算へ遠く褒めて去に  
面白い人ですだけは物足らぬ 鳥取縣  
長生きをした葬いは晴れやかな  
再生の背廣の胸にある悩み 岡山縣  
拡大鏡特價のきずを見つけ出し  
丸帯もどつしり重い嬉しい日 岡山縣  
哀別をギターに乗せて月の窓  
恒例のストへ庶民は振り向かず 和歌山縣  
退屈を知らぬ暮して妻は老い

同 星川 陽石  
同 平尾 豊子  
同 岡島 孤舟  
同 池田 古心  
同 中土居 土筆坊  
同 穂北ベン郎  
同 藤田 蘇人  
同 富池 茂人  
同 亀崎 漫歩  
同 浜口志賀夫  
同 東 静人  
同 久保田竹青  
同

工場のカンナはストに拘らず 大洲市  
気に入つた值札気に入らぬ服地  
善人の寝顔にされた無精髭 松江府  
酒癖を知らず焼酎吞ませてる  
警笛をとまかく牛へ鳴らして見 倉敷市  
無燈火の自轉車唄で摺れ違い  
看板屋派手に師走の街にする 岐阜市  
デパートへ都会馴れした市場籠  
鉢巻へ問えば仕事が趣味とやら 愛媛縣  
うまいものなら食えまる胃酸過多  
ストツブのきく愛情へもの足らず 大阪府  
うちの子のへツブバーはよ似合い 岡山縣  
無事な顔見ながら母が云う叱言  
茶の師匠茶器で旅館の格を決め 兵庫縣  
一寸いゝ所を見せて足が出る  
これだけにしても旦那は浮気をし 岡山縣  
浮気ふと財布の底が気にかゝり  
扶助料を受けて犬猫までも飼ひ 倉敷市  
あれ程に云うたミシンが邪魔になり  
コスモスに取巻かれ世にうき住み 赤穂市  
美しい女は識らぬ敵を持ち  
時稼ぐなどと希望に遠くいる 大阪府  
湯疲れと知るボストンに有るラベル  
結婚が元の不精にしてしまひ 新潟縣  
あだ名にもなれて恩師を囲む会  
写真見てきめた女房が五人生み 岡山縣

米沢 曉明  
同 舟木與根一  
同 山本 春也  
同 高山 武士  
同 鳥井 川島  
同 伊藤 光二  
同 小川 貫坊  
同 前川左文字  
同 石原 文郎  
同 長尾 越鳥  
同 川西 去水  
同 丹波 太路  
同 高野 不二  
同 東坂 義章

# 謹賀新春

川柳  
雜誌社 備前支部

浜田久米雄  
大森娛句楽  
永松東岸子  
外 一 同

間嶋青丹子  
京都府相楽郡木津町  
松川杜的  
京都市下京区西九条  
開ヶ町一三  
正本水客  
大阪市東住吉区湯里  
町四九五

小西雄々  
米子市富士見町二三九  
北条文郷  
米子市皆生国立病院  
三嶋美笑  
米子市道笑町一

川柳雜誌社  
玉造支部  
大阪市天王寺区窄相  
山町一四七  
清水白柳子方



死の灰は降つても夕餉のうまさな  
 冬はよし貧乏人はオーバ着る東京市 同 山田スミ子  
 コンバクト今日は嬉しい涙ふく  
 死土産らしい外遊やつてのけ長野市 同 森本黒天子  
 二代目が音痴でやつと持ちこたえ  
 すねて居る小さな抗議気にかゝり出雲市 同 野々村詩朗  
 嫁と云う業を才ある妻続け  
 云い勝つて見てもつまらぬ君と僕出雲市 同 森山 莊  
 雛も可愛いものよ初卵  
 御馳走は海が近いと云う招き下関市 同 多田はなみ  
 夏やせに裸体を恐いものにさせ  
 友の死へ香典響く医療保護貝塚市 同 和田 旅兒  
 洗礼を受けて人柄一変し  
 闊取つたストに物價が又騰り貝塚市 同 芝原 洋史  
 お茶屋とは似ても似つかぬ傘を貸し  
 二号にも言はして欲しいぐちが岡山縣 同 檀原伊佐武  
 この僕も親馬鹿の二人参観日  
 新しい靴へ小指が抗議する大阪市 同 安井 久子  
 カラス鳴いて病人の窓をしめ  
 もめるなら知るとポート流れ出し貝塚市 同 田中ひぐし  
 灯の下の母は荒波越えた皺天理市 同 藤井 千年  
 ネオンつきたそがれもなく暮京都府 同 柿本 古竹  
 織田作の飲んでいそうな法善寺京都市 同 堀口 欣一  
 親馬鹿になつて楽しい日が続き倉敷市 同 小野 廣志  
 アパートへ帰れば母の顔になり大阪市 同 正口 辰始  
 此のしみが何時も化粧の手間を岡山縣 同 松下 衡陽

倦怠期負うた子供に導かれ貝塚市 秋山風太郎  
 結核ときいて顔色見直され貝塚市 秋山天一坊  
 高原に病んで都会の灯がこいし貝塚市 杉本 一鶴  
 接吻の紅を気にするのも女堺市 岡崎 泰三  
 十二月家計簿忘れがちになり高知市 小松 繁春  
 香油をぬつて皺夫も街へ降り和歌山縣 岸本 木魚  
 新世帯お雑煮をたく智慧借鳥取縣 星野 侑正  
 義理を越すプレゼントする娘に慌て下関市 宗貞 白馬  
 商談が成らず吸殻だけいぶり兵庫縣 出口白猫兒  
 釣竿の影ゆらゆらと空の青石川縣 中松 一恒  
 ここからが銀座と柳風にゆれ倉敷市 岡野風の子  
 病床へジワリジワリと義理がより大阪市 杉森眞沙魚  
 農繁を前に牛にも麦を炊く岡山縣 亀井 星浦  
 すき間風探して一人暮れかゝり大阪市 増本 翠露  
 村長の音痴に手拍子よく合わし大阪市 川口 秋香  
 贈るらし賣娘が好きなネツクレス大阪市 安井 蜂呂  
 倅は親子で五目並べする貝塚市 平山 港雨  
 お茶飲んで老らくの恋はかどらず廣島市 藤川 幻詩  
 大雪もかまわず借金取が来る岡山縣 田淵 笑鬼  
 病み臥して赤き唇燃えぬま貝塚市 護川 梢月  
 又酒を吸う料理屋の疊替え倉敷市 佐藤千代春  
 無我の境それだけでよし糸を垂れ出雲市 原 独仙  
 立候補すれば俺でも先生さ鳥取市 北村 三步  
 五万円抱いて寝た夜はあたくし宮崎市 野口卯之助  
 恐妻家と云われ我家は波立たず大阪市 小林 進歩  
 草枕雲が詩的に見えた午后大阪市 情水 和夫

川柳雜誌社	梅田支部	長谷川 三司	岩田 一夜	中塚 夢生	真鍋 悅朗	節間 杏花	水谷 鮎美
大阪市西成区玉出新町通 一ノ一	後 藤 梅 志	石川県大聖寺町荒町四三	那 谷 光 郎	石川県江沼郡片山津町作見	中 松 一 恒	神戸市東灘区本山町田中 二九一	小 倉 へ と ち
岡山県苫田郡鏡野町沖	坂 手 有 子	大阪市生野区北生野町一 ノ二五	金 井 文 秋	川雑字部支部	国 弘 半 休	宇部市西区万来町鉄道宿舎	



手間足らぬ時嫁貰う話が出	田満がかくしきれない顔の艶	風邪に寝て世のせち辛さ考える	飲みぼけへパチンコせよと意見	老らくの恋は日に／＼はでに見え	趣味ですか成程プロちや出せぬ	幸福な生活を病んでから解り	退屈が小猫の座布團縫つて	退屈へ又だいやるの酷使され	考えていた苦なのに嘘が出ず	乗りかえに人が走るから走り	芸術のスポーツのと秋も暮れ	書家の字が嫌でならぬと言	のぞみをば子供に托す年令となり	全快を祝うぶどう酒妻の酌	影一つ一つへ秋がつきまとい	恋人の電話にはつと横を見る	疎開先血のつながりを信じ住む	湯の町へ来て三ヶ月もほめられる	正札が五桁つつつと通り抜け	干柿が子供へ罪な二階がり	窓から見ゆる山いが栗がありそ	蟻一つ夜業の灯を慕うて来
下関市	下関市	下関市	馬	岡山縣	和歌山縣	和歌山縣	和歌山縣	和歌山縣	和歌山縣	大阪府	大阪府	大阪府	大阪府	松江府	西宮市	西宮市	岡山縣	岡山縣	下関市	山口縣	大阪府	
三谷	加藤	重永茂理智	神田花花史	坂手	木下	田中無津美	松本	松本	松本	池戸	中谷ハナ子	井上	榎本みのる	加藤	奥村	徳永	吉田	田口	中村九呂平	岡本	橋本みどり	
柳蛙	司楼	司楼	花史	有子	一休	無津美	旅人	竹外	溪泉	桃村	ハナ子	鳴水	隆志	善坊	水里	紫陽	清遊	紫陽	九呂平	鳥石	みどり	
勤続で右翼は使丁の四十年	ナイターがすんで気がつくま	斗病につかれた声がとがつて	古日記思い出せない符号ある	曇後晴予報をあての旅に出る	凶作であろうとデヤン	幕合を四五分借りるスポンサー	文化の日カメラをちよつと肩	手元不如意家内の内職馬鹿にせず	肩までしかかないわよ初恋樂し	デフレ記事嘆く休でよく肥り	思い出の道も今では子を脊負い	一と騒ぎせねば越年出来ぬスト	新婚の新婚妻帯を手傳わせ	その儘の同じ道踏む嫁姑	災害へ援助の服が身に合わず	生活のことにはふれず呑明し	思出も悲し札束に負けた身は	社長たゞ社の象徴に終るなり	美人一人住めば二号の様に見え	惜し事しましたなあと他人の辞	居眠りするなら来ねばよい講演会	出張の無事をエハガキ托される
岡山縣	天理市	天理市	天理市	愛媛縣	西大寺市	堺市	松江市	鳥取市	倉吉市	出雲市	和歌山縣	岡山縣	尾崎市	尾崎市	岡山縣	岡山縣	倉敷市	和歌山市	宇部市	下関市	下関市	
佐々部	仲野	坂本	菱田	横田	西山	田中	小林孤呂二	岩田天保錢	横山	三吉	植松	松島	中屋	岸本	野田	野田	田中	二宮仙柳堂	中村九呂平	松本十字星	日高	
藤佐	光子	十平	満秋	放人	晴々	春翠	孤呂二	天保錢	宣昭	美好	福美	不在	澄子	円馬	太郎	一念	雄峰	柳堂	九呂平	十字星	高重	

川 雑 倉 敷 支 部 木村千容 田垣方大 水谷谷水 椛原一善 松村万古 藤井春日 野田素身郎 安原斜木 矢吹日出雄 佐藤千代春 長尾越鳥	川 柳 部 一 同 社会式株道鉄気電海南	謹賀新春



# 三國志

## 東野大八

私は「三國志」が大好きである。大陸時代から現在まで方々なく読み返さうむことを知らないでいる。中国には三大奇書だとか、五大大奇書だとかいろいろある。「三國志」をはじめ「水滸伝」「西遊記」「聊斎志異」「三俠五義」「西廂記」「紅樓夢」などがそれだが、やっぱり私には一番「三國志」が性に合っている。「水滸伝」も愛読したが、遊侠の徒が梁山伯に抱つて大いに暴れるのは痛快だが、どうも野郎事大な点があつてついでにゆけない。「西遊記」も千変万化の孫悟空の大活躍で手に汗にぎるが、たゞそれだけのものといえぬ。仏教的な深い意味がそれぞれあつて、つゝこめばそれなりの味々が出ることは判るものゝ、変化が一律であつて人間性がない。もつともお化けばかりなんだから注文する方がムリかもしれない。お化けといえは「聊斎志異」も同様だが、これは妖奇

の味覚というものだけである。「三俠五義」は知略の書ともいえない、大岡裁きのヒントはすべてこから出ていると私は考えたりしているが、これは推理的興味が深い点をかろ。「西廂記」や「紅樓夢」は中国古典のユニークな詠唱文学だが、これは漢詞か、韻文に造詣深い人におまかせした方がよさそうに思える。こうみると「三國志」には、人間の持つすべての欲望、思想、行為、感情が運命的な量感と興行きをもつて綾織りのように構成されている。英雄、豪傑のキラ星のように登場するこの舞台には、人間が捨て切れない喜怒哀楽と義理人情が一國一城の興亡とともにめまぐるしく彩られ語つてくさされている。魯迅もこれを大いに愛読していたらしく、劉備は偽にして関羽は義、孔明は妖に近し、と三國志評を残している。魯迅のこの評は結構だが、これに対し私が不満なのは、彼が張飛を忘

れていることだ。三國志を読んでも、彼が出てこないと言つても面白くない。生一本でがむしやらで、短気もの、そのくせ滅法強い、単純そのものゝ人間張飛はまるで森の石松にそつくりである。長板橋で劉備の軍が大敗し、彼の生命も今はこれまでとみえたとき、張飛がたゞ一騎その橋のためとつゝ立つて「俺が燕人張飛だ」というと、押よせた潮のごとき曹操の大軍はキモを潰して三十里も逃げたという。また劉備が孔明の庵を三度も訪ねたが、孔明が動きそうにないのを見て彼が、「生意氣な野郎だヒネリ潰してくれん」とかかんになつて怒る、そうした彼の最後がまた至極彼らしい。劉備に叱られたのでムシャクシャぐつて大いびきで寝入つたところを、その部下のために寝首をかゝ

後にくわしい彼の末路というわけだ。とにかく関羽、孔明が三國志では第一級の主役だが、この二人になると絶対的に関羽である。義勇礼智の権化としての関羽の声望は、中国の氏神様として関帝廟に祀られている彼の姿によつて語るまでもない。シナ芝居では三國志の通しという絶対大入満員である。日本の忠臣蔵のそれとよく似ている。赤面に長鬚武生の関羽が舞台上現れると、観客席は騒然、かくて彼とともに笑い彼とともに泣く大カブキ？がはじまる。吉川英治にも「三國志」があるが、これは日本人経営のシナ料理店で入宝菜を食つてようだ。とにかく三國志を読むと、時折今の政局の人間をよくその中に登場する人物にあてはめてみるが、どれもこれも役不足である。吉田茂や鳩山一郎などをもつてきても、この小説の誰々のイメージにはびつたり来ない。まあ強いていうなら、適役は吉田茂の衰影ぐらいのものであろうか。三國志ではこの男が一番イヤな奴である。権勢をほしいままにしてゴマサリを大臣にして大賢人も平気で殺傷する、終りに自軍大敗の報に血を二斗もはいて死ぬのだが、こゝから三國志は曹操に傾くことになる。

陸に載せた私の三國志の句を改作してお眼にかけましょう。

桃園の誓い  
兄弟のサカズキだけは特級酒  
待たされる劉備タケノコまでもほめ  
長板橋の張飛  
鉄筋ときめた長板橋建設委  
孔明出處  
里いもの出来そのまゝに庵を出る  
貂禪と呂布  
立つている呂布ヘガーターあげてみせ  
赤壁の戦い  
赤壁の水で曹操風邪をひき  
死せる孔明生ける  
仲達を走らす  
孔明死去  
仲達が元祖となつた霊核車  
星一つムダに光らず五丈原

ホテルと 御座敷 2階

すき焼 200円より

和洋定食 250円より

北極星

TEL (64) 1275-7

# 吾れ若し 妻なりせば

あなたが若し妻の立場であつたらどうなさりたいと思われませんか。また夫に対する希望など、妻?としての理想をお尋ね致しました。原稿到着順。(編集局)

## 結婚十年

東野 大八

私の主人は戦争で丹下左膳になりました。出征するとき私と祝言していつたのでウマイこと奥様にありついたわけです。もしチョンガのままでこんなことになつたら男前は悪いし金もないのでヨメのきてもないと思います。それが本人に判つているか、いないかで私の生活や人生の待遇が變つてきます。さいわいこの点をよく承知しているのでどうやらこちらの氣持も落つきません。とにかくもう結婚十年今更どうこうという注文も希望もありませんが、家にいてできるだけ子供と遊ぶ時間がほしいと思います。

## 甘える妻に

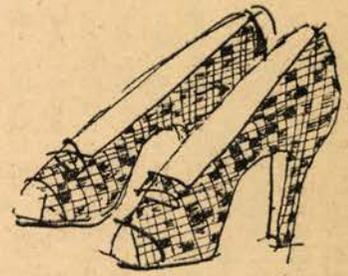
丸山弓削平

大いに良人に甘えます。「良妻だそうだが甘えては呉れず」ではいけません。良人の句作、創作に夜更けにはコーヒー位持つて行きます。自作を読んで呉れる良人に侍して句評もしたりして「居眠つていなかつた」と妻言ひ張りぬ」などと居眠りなんか決してしません。子が次々と出来ても「出てゆけ」と言えばあなたが出たらどう」「一輪をとる程に女房の強さかな」と良人を慨嘆したりなんかしません。

## 山内一豊の妻で

戸田 古方

夫が妻にかわつてもかわらないのは川柳と念仏だけ。無念無想何事も松にしたがう候か、力一つばいうちのひとを愛してゆくばかり。うちのひとは満二十五年惚



## 十八世紀の遺物

戸倉 普天

若し私が六十を越した老妻であるとするならばあらゆる見にくい物慾を去つて、焦らず喉がず、物静かな泰然たる態度を採つて、一切我意を張らない処のほんとうの御隠居さんになつて、鏡の様な明るい氣持で夫を助け、時には夫のやり過ぎや行き過ぎを幾分でも是正す可く努めたいと思ふ。申す迄もないが夫の趣味にはそれが著しく醜悪なものでない限り充分同調して行き度いと思ふ。

だがこんな妻だつたら十八世紀の遺物でしようか!!

## たぬき式

前田 伍健

「若し妻だつたら」「私は、たぬき式で対所致します」つまり、他ぬき「足らぬところも化ける」時に尻尾を出す、太貫き、とぼけ、図太き、茶味的で接し、先ず夫の長所短所を、川柳学問の、「注意力」「推理力」「直観力」「工夫力」「理解力」「連想力」「判断力」「洞察力」「おかしみ、軽み、慕み、情み、美み」の訓練と教養に、努めよき、他ぬき妻になります。男なんて、夫なんて、甘いもんです。然るべく腹つづみを打ち、時には脅かしてもやります。夫に希望などは、失望の元です。こちらが希望の術に、化かすよう勉めま

## 少々の女狂いも結構

速水眞珠洞

色白く健康である事が女として又妻としても、第一意義に考えます。親から持参金を沢山貰つて置きたい事、男たるものしみつたれば嫌いで競輪やパチンコやスリルをこのむ、やる事ははきく、と運んで呉れるという所。少々の女狂いは人間味があつて従つて其反映が妻へも幸福が移動して来る。花袋の「春泥」ではないが、やれるだけやつてのける夫がほしい。

## 平凡に

相元 紋太

主人は、何分老年ですから、今では永生きをして貰うこと、慾を言え、生活をもつと楽にして欲しいのですが、それも無理でしょう。順序として私より先に死んで貰わぬと、主人自身が困ると思ひます。あとは何とかやつて行きま

若しこれが結婚当時ですと、同じ川柳がやめられぬものなら、もう少し秩序立てて、科学的にやつたらどうですと云う処ですが、私も若かつたので、主人が盲目滅法にやつているのを、どうすることも出来ませんでした。現在、主人はどう思つているか知りませんが、平凡人として、私と共に生きていて呉れ、ばよろしいが、若し社会的に何かの野心でも持つていると分れば、ゴッソとやつてやるつもりです。(紋太の妻として)

## 政治に関心を

木村 水堂

憲法で保障されている男女同権と顔面通りの主張は致し度くはないが、もう少し「妻」という地位を認識して頂きたいと思ひます。国民の血税で成り立つ予算を、地位や権力を悪用して私腹を肥したり、そうした利権にありつこうと足掻いているおえらい政治屋を夫に持とうなんて野心はなく、そ

れよりも無い智慧を絞つて下手な川柳を作つて喜んでゐるような平凡な夫に魅力を感じます。

「妻」と云う限定された立場だけでなく、女性としてもつと政治に関心を持ちたいと思つて、い政治が出来たら明るい社会が出来てそれが嬉しい家庭に直結しますから……

### うるさ型

服部十九平

先ず憲法第十四条の男女同権の「同権」権を放棄して夫尊女卑へ後退する。次に民法第八百十八条の親権の父母同権を否定して母の親権独占権を獲得する。

「解説」政治、経済、社交等の同権は面倒臭いから夫に委せ自分は子供の教育、躾に専念する、男の子には夫の、女の子には自分の欠点を遺伝しないように理想的人格を創造する。斯うすることにより夫からはずるい奴、子供からはうるさ型と批判されることは百も承知のうえである。

妻として丙でも母で甲をとる

### 誰か夢なき

山根 白星

クリスチャンに帰依いたします（但しお酒は少々頂かせて貰います）是が非でも電気洗濯機を、おねだりいたします。

家事の合間……と言ふより作句の合間に家事にいそしみます。語

学のレッスンに専念いたします（特に英語、仏語、露語をマスターして原書でスラ／＼読みたいと思つてます）

子供は一人に限定し無插分婉法を採用いたします。

夫の浮気をやきもちをやいたり、月給袋を強奪したりなどは決していたしません。『眼には眼を』『歯には歯を』式か乃至は『真綿で首を』式で事を計ります。

### 妻の政治力

藤本 満年

私は夫を大きな坊やのように、手取り、足取り、家にいるときは下へも置かないように大事にしてやります。男というものは、たいがい、我まゝで、横着者ですから、痒ゆいところに手の届く妻のサービスは、眼を細めて喜ぶにちがいありません。しかし、それでは余りに古い考えで、如何にも封建的な妻の座を想像されますが、それこそ素人の悲しさというべきで、男というものは案外自惚れが強く、妻の親切にはすぐ甘えるものです。もし妻の手を放れて、旅をしたり、宿に寝たりすると、妻のいない不便、不自由を痛感し、必然的に家庭を恋しがらにちがいありません。その弱点につけこみ、ます／＼夫を大切にすると、ます／＼家庭を恋しがり、妻

の一びん一笑を無性に楽しむようになります。それは結局妻の支配

下に入ることになるわけで、母性愛以上の妻の政治力というべきです。

### 飲んでほしい

川上三太郎

飲んでほしやめてもほしい酒をつぎ（霞乃）

——という奥さんになりますな。それつきりです。いけませんでしようか。

### 子供を楽しみに

三條東洋樹

一、私の旦那さんは赤ちやんのうに朝の寝起きの気分が悪く、頑固な頭痛持ちですから、毎朝床の上で指圧を上げてあげます。一、胃も丈夫ではありませんから洗濯機を売つてもミキサーを買つて、消化のよいものを食べていただきます。

一、綺麗好きのくせに何一つ自分で家庭の用事をしてくれない夫を持つた不幸を、せめて川柳にでも忘れたいと思ふのですが、突のところその閑さありません。

一、夫への不足は十二章でも書き足りませんが、まあ／＼諦めて、早く子供が帝太へ入り世間へ出てくれる事です。

### 日本一の妻

阪田 良坊

三十年連れ添つて来た老愚妻若子のそのまゝを理想とします。若

### 料理を上手に

前田 雀郎

し私が妻だつたら日本一の理想の妻になれる自信があります。ただ妻から夫への希望は沢山あることが現在夫たる私として突に残念ですが仕方がない。例えば世の中の夫はあまりに飲み吸いすぎることに、禁酒禁煙する必要はないが今少し節酒、節煙されたい事。仕事や仕事の延長ばかり考えないで妻を友として親しむ事。職業はやはり医者がいい、開業医でない勤めの医者（小生の様な？）であること。

あまりこせ／＼せぬ男（ぼんやりの男へこんな良い女房）という位が理想です。思い切り若返つてあまえて見たい……いついつまでも、いつまでも。私が若し妻だつたら次の様な拙吟が出ます。夫婦相笑われまいぞ笑うまい

### 相縁奇縁

村田 周魚

ともかくも認めてゐます夫の位置  
たまさかに嬉しい無理の辭  
機嫌

### 多忙な夫

岸本 水府

忙しき、仕事、奉仕、交友——まあこんなものかと満足ともつかず、あきらめともつかず。よつてどうしてくれとも思いません。強いて言えはもつと儲けてほしいというだけ。たばこをやめ、晩酌をやめてくれたのは何より。

### 川柳一辺到て

尼 緑之助

家内全員は勿論、室内のあり方も川柳一辺到、町の婦人会を日本一つ一つの川柳婦人会と致します。通知書も句でする、訓示も、発言

も句といつた調子。

### 一夫一婦主義

水谷 鮎美

一姫二太郎三男坊の三人の良き母でありたい。パーマはあまりかけない。絶世の美人とまではゆかないが愛嬌はこぼれるばかり、耳は福耳、クレオパトラの鼻ほどでもない、和服がしつくりと似合うよき妻よき母よき女でありたい。主人は活動家とくに特技はなく

共結構、妻を理解し、ふたりきりの夜の世界では十二分に熱情的をして心的に老いない方、そして家庭の心の燈を信じきり、年令は十を違ひ。ちよつと禿上りの重厚さも欲しい。男は魔物ですからあくまでも一夫一婦主義でないと承知しません。

### 良妻賢母

市場没食子

一、勿論私なら良妻賢母です。

でも余り甲斐性なしの男ではネー……しかし気の置けぬ夫婦でありたいと思ひます。但しこれは私の家庭の夫婦を逆にした場合のことです。

デフレの今日夫の収入が一番考えられます。

一、銀婚が目の前にはぶら下つていゝ今尚、働かねば生活していけない夫を気の毒にも思うし甲斐性ないとも思うが別れると云うような気は子供の手前もあり微塵も出ない。

い。反面経済的に恵まれると二号三号を置かれるので、むしろ程々の儲け方がよいとも思う。酒の苦勞もさる事ながら女の苦勞はしともない。

一、私は無慾です抱負と云うようなものを持つていないと云える。しかし情熱の枯れないうちに旅行も二人でしたいし、台所の改繕や洗濯機の購入等文化的な生活をして一生を送りたい。



## 集路一

### 商人

西尾 榮選

損をしたことは商人咄すなり トン坊  
行商は隣で売つたことも言い同  
あの街この街商人としての視察同  
二代目は商人にせぬ金が出来 鳥石  
町内は屋号で通る店構え 竹涼  
商人の笑い計算した笑い 夏六  
商人は無口な客へ気をつかい 賀峰

先代は行商といふ店構え 別城  
商人のカンにさわつた値切やう 一柴  
大福帳と息子の簿記がもめ 五茶  
エロニスト読んで二代目夢があり 同  
商人の良き信用の二字に生き 一朗  
金比羅の商人という寄附の高 星浦  
役人のかけひき商人ひつかり 阿茶  
小商人つい鼻唄が出る儲け 牧人  
商人としての卑屈へ自己謙悪 同  
大学を出して家業を嫌われる 一恒

小商人の伴法科を専攻し 進歩  
商人の娘です商人嫌いです 恵二朗  
豪商であつた昔の寄進燈 光郎  
商人は金で割りきり解決し 鈴彦  
村が市になつて商人旗を立て 晶平  
もつて生れた大阪弁も小商人 同  
露天商天氣が良いと品が反り 山雨楼  
二代目は株式にする鬘を立て 竹涼  
商人のタイプに遠い若旦那 南天  
商人といういでたちを親しまれ 美能留  
へんくつを看板にして露店出す 葉光  
番頭をなだめて旦那まけてくれ 同  
はななれをほめて商人如才なし 初甫  
商人にする気ならない気の息子 芳仙  
慶応を出て前掛の後をつぎ 阿茶  
仲人もチヨイ／＼やつて行商人 広志  
奥さんにやかないまへんという愛想 千年  
初めての客にも毎度有難とら 春帆

## 謹賀新春

川柳雜誌社

### 京都支部

- 岩見とくじ
- 岩見キヨ
- 今田蘇海
- 井ノ下晴芽
- 井ノ下秀徒
- 石川よしる
- 大鶴喜由
- 田中千潮
- 田中烏雀
- 竹松九角
- 楠光二郎
- 柳本憲一郎
- 八木迷々
- 小林亀一
- 溝川さよし
- 溝川ちか子
- 平井絵丘
- 平井司郎
- 本儀親生

去年から全店投売まだつづき 満秋  
 予想だけではや商人の売惜しみ 十悟  
 リベートをきりけなく贈る業も長け 白馬  
 役人の癖がぬけない小商人 木魚  
 電話でも華儀して商人愛想よし 井蛙  
 商売のこつも覚えた内儀ぶり 春日  
 流行を売つてて地味な暮しよう 満秋  
 昔なら番頭さんという背広 鼓風  
 商売のこつ空箱許り積み 夢介  
 商人をだますつもりがだされた 夜潮  
 場末なる商人宿の字も似合い 十九平  
 目の毒というに商人荷をひろげ 有子  
 商人は給仕にさえも頭さげ 圭水  
 商人の文学趣味も一寸言い ひか平  
 祭の字つけて商人抜け目なし 万古  
 佳・店先で見せる笑顔は別にもち 惠二朗  
 佳・損してまんねんと商人うつくれ 雄声  
 佳・福の神商人らしい応接間 柳叟  
 佳・番頭の縁を見つけてくる旦那 山雨楼  
 佳・行商の奄美言葉がよく売れる 古心  
 軸・大阪の商売人やと言はれてそれとよし  
 浪速商人ながら句もひねり

舌

新川博也選

二枚舌使う男で隙がなし 夢介  
 二枚舌右か左か詰め寄られ 一念

二枚舌エンマ地獄であきれたり 初甫  
 舌づつみうまい所をまた教え 和友  
 初孫が廻らぬ舌で笑わせる 水星  
 食慾も恢復近し舌舐り 芳の人  
 義歯ももう不自然でない舌ざわり 別城  
 看護婦はマスクの中で舌を出し 鈴彦  
 後ろ向き嘘が通つた長い舌 鳥石  
 上役へうつかり舌打して了い 春日  
 身の上に舐れて巻舌ふとときれ 惠二朗  
 ヤツスした舌へ煙草の香がうつり 有子  
 農繁期くたびれまじした牛の舌 莊  
 噛み当てた石遶り出した舌の先 トン坊  
 新薬は舌をかむよな名で売られ 満佐志  
 慌てる証拠は舌をかんでおり 鉄児  
 客観的立場で云えば毒舌家 一蝶  
 云うだけは云う気の舌がもつれかき 蘇堂  
 牛の舌器用に鼻の穴をなめ 知久平  
 毒舌の一向牙えぬ気の弱り 阿茶  
 総人歯具合の悪い舌の位置 九呂平  
 言ひ負けた電話へ舌がもつれて来 井蛙  
 嘘ついてしまった舌がこそほゆし 葉光  
 久々に故郷の味を舌で知り 五茶  
 抜いた舌闔魔小背へ売りに来る 伍長  
 爛場では舌を出されてあるお客 木魚  
 縁談へ仲人の舌いそがしい ひでを  
 黙があるらしいと舌を診てもらい 十悟  
 巻舌で書記長闘志かきたてる 牧人  
 庖丁の牙えへうなづく舌ざわり 同  
 天婦羅を喰つたか舌の廻り様 保天  
 支関へ子供の舌が逃げて行き 同  
 此の舌が廻りすぎたか鹹になり 古竹  
 舌だけは昔の味を覚えて居 同  
 よう効いた山葵を舌が先ず認め 正郎  
 舌打をして諦めがつきかねる 同  
 激論のどちらも舌がよく廻り 賀峰  
 かんじんの話へ舌がもつれがち 同  
 二枚舌まだ云い足らぬ顔である 夏六  
 舌あるを下手な歯医者が意識させ 同  
 一寸した失敗舌を出してすみ 十九平  
 舌先で丸めてマダム北叟笑み 同  
 けつたいなお人や舌を打ち 同  
 佳・痛い歯はこれと押える舌の先 昌平  
 佳・サツカリン使つた味と舌は知り 美能留  
 佳・舌の上に丸めてお茶の味を賞め 迂川  
 佳・舌出して舌を出させる小兒科医 初甫  
 佳・小遣をせしめた方の長い舌 保天  
 佳・角砂糖二個では舌は不服なり 南天  
 佳・もういけるかい舌へおのせて見る 十悟  
 佳・酒はまだ駄目かと舌を診て貰い 良坊  
 佳・外米を猫もうなづく舌ざわり 竹涼  
 佳・舌先でベージめくつた置炬燵 惠二朗  
 佳・身の上に舐れて巻舌ふとときれ 同  
 佳・兎も角も任せろと云う舌の先 蘇堂  
 人・もう一度舌見てカテナ書き込まれ 賀峰  
 地・死後の事もつれる舌で言い残し 葉光  
 天・舌足らぬところは母が云うてっ 代仕男

岡山県久米郡久米南町  
 川雜弓削支部  
 弓削川柳社

福島鉄児  
 丸山弓削平  
 直原七面山  
 黒田笑泉  
 家本富至  
 横部牛歩  
 浜野奇童  
 片山巷雨  
 不朽洞会員

川雜岡山支部

岡山県内田三三五  
 大森風来子  
 服部十九平  
 延永忠美  
 津田麦太楼  
 岡村牛耕  
 矢田笑気坊  
 宗高八ツ茶  
 小坂田雨水  
 南部ひでを

散髪は

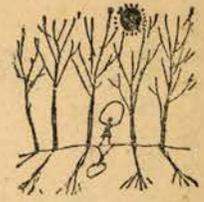
何はともあれ

男まえ

寺田町裏駅前

南柳

# 雑筆・春・秋



## ねずみの習性

### 丸尾潮花

人間に一番身近い動物に、犬、猫、猿、鼠、馬、牛、兎等がありますが、その中で一番人間に莫大な損害を与えて居るところの鼠を人間は猫や犬ほどに頭に置いて居ないのではないかと私は思う。それほど川柳の中に猫や犬は多く詠まれていても、鼠の句はほとんどお眼にかゝらないと言ふことであります。猫に鼠と昔からよく言われます。猫の好物の一つにねずみのあることは言うまでもありませんが、初心者の方の句に「猫ちゃんねずみが嫌いトトが好き」と言うのがありました。トトもたしかに好物でしょう。お正月のお鏡餅に鼠もまたつきものです。鼠は大黒様のお使いだと言われています。神の使いの鼠が何故盗み喰いをするのか、万才師に言わせると大黒さまは本当は福の神ではなく貧乏で、俵二俵が全財

産であるから、したがって鼠は盗み喰いをしなければ生きて行けないとか、面白い理屈に合つた様な合わない様なことを言つて人々を笑わせますが、阪大の田中博士の説に依りますと私達は此の大黒さまのお使いに驚く程多くの損害をあたらせている事がわかるのであります。世界中で鼠の種類は二百六十種類あり、日本だけでも三十八種類の鼠が居り、家鼠は日本人の二倍から五倍に達していてドブ鼠を合せると十倍と言ふ数字になります。此等の鼠が自分の体の約四分の一の食料を喰べるとすると一匹が二十五匁位になり、日本の鼠を計算しますと一億四千万匹、一日に一万二千石の食糧を喰べ一ケ年に四三七万石の食料を荒していると言ふことになり、此の数は日本が現在外国から輸入しているところの外米の量に匹敵するものであると言われて居ります。外国では鼠が食物を荒すと云ふ様な事は少いが鼠に依つて起る火災が相当あると言われて居ります。又鼠の前歯はいくらでも伸びて行く性格をもつているため歯をへらす目的で物をかじりま

鼠が物を噛む力はコンクリートに孔をあける。阪大の実験では四ミリの鉄板を三日間で孔をあける位いで相当な力を有しているのであります。一年間に私達がこうむつて居る衣食住の損失は一匹の鼠が九〇〇〇円の損害をかけた

いることになるそうです。鼠に依る伝染病である発疹熱は鼠のオスの金玉の中に菌がありオスの八十パーセント迄が此の菌をもつていて鼠の繁殖期に此れが多いと言われているのです。鼠はどの様な特長をもつて居るかと申しますと、習性として赤い色を好む為に巣を造る時はたいてい赤い布切れをもつて来て居る。そして非常に耳がさつきかしい。鼠は人間の言葉の内十六種は聞き分けることが出来、鼻は人間の四十倍の鋭敏さをもつて居ると言われて居ります。尾の長いものは家鼠、短いものは野鼠、天井に居るものはエヂプト鼠であります。鼠を捕るには赤い色を利用すると効果があるそうです。ねこいらすを入れたものを赤い色の紙で包んで来そうなところへ置くと云ふ事も考えられます。

大黒さんのお使いがまたお餅を噛つたりコロコロころぼせて運んで行く時になりました。鼠よりトトの好きな猫を二匹も三匹も飼わないように、鼠の好きな猫を一匹飼いまししょう。無論鼠以外に食料もいりませんがね。

## 不正直者が馬鹿を見る

### 長野文庫

今治市から隣接の波止浜町への道路は最近の交通量に比べて余りに貧弱なので去年から新道路の建設に着手し、今治市営球場前までは完成、県道に直結する約六百米ほどが尻切れになつて居たが、現在波止浜町側から今治市側と双方から新築工事(盛工作业)にかゝつて居る。ところがその中間に凡そ五十米ばかり沼地が残つて居るので完全に通行は出来ないが、両端が何れも整備されて居るので歩行者や自転車(ドン／＼)乗り入れて来る、勿論「通行禁止」の制札は立て、居るが通り抜け無用で通り抜けが知

と云う川柳通り禁止は即ち通行出来る。所が制札通り通行不能なのでスゴ／＼と引き返して行く人が後を絶たぬそうだ。何もかも正直者が馬鹿を見る現在この道路に於ては不正直者が馬鹿を見るので道路

**ヒゲツリ後に**  
アストリンゼンは世界的常識!

- 1 生々した男性美をつくる
- 2 爽快でヒゲツリがたのしい
- 3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力!

**明色アストリンゼン**  
桃谷順天館

## 謹賀新春

中島 生々庵

大阪市南区鰻谷  
仲之町二〇番地

南区医師会文化部

杏林川柳会  
(順不問)

- 河村 瑞川
- 牟田 一哲
- 長谷川 迷路
- 中島 生々庵
- 安岡 珊枝郎
- 海野 比呂史
- 田中 烏耕
- 中島 兎庵
- 平尾 太希志
- 岩崎 一伸
- 山川 阿茶
- 仙波 杏子

藤本 満年  
藤本 茶々

東京都目黒区  
平町二五

工事中の人たちが溜飲をさげて居るそうだが、あらゆるものが斯うあり度い。

正直に神を宿らすよい政治

### サラリーマン

### 句集

久保和友

サラリーマンをしていると「あの人はいよいよ紳士」だといわれる癖になつても、一寸も本人は紳士らしくない。サラリーマンとは地位もすつかり忘れさせてしまふものである。いい癖をして頭は半分白髪もまじつている中年の紳士が十数年使つた皮の鞆に弁当箱を入れてカタリコトリと通勤のためにプラツトホームを歩いてゐる。まさに人生の哀愁である。サラリーマンとはこんなにも悲しい名前である。人生うかばれそえない。

陽児

最近サラリーマンの隨筆として有名になつた「沢庵のしつぽ」の作者中村武志氏の「小説公園」その他の雑誌に発表した短篇を集めた小説集「目白三平」が某出版社から出たのを讀んだ。中村氏は私と勤め先を同じうする人だが有名にならない前から部内で発行されている雑誌に隨筆なんかをコッポツと書いていた。それを集めて自分でタテ三寸四分ヨコ五寸の小さ

本本を出した。それを各方面へ無

料であるいは実費で送つて週刊誌などに認められたのである。何が有名になるものになるかわからぬ世の中だが中村氏がこの自費本を出さなかつたら有名にはならなかつたのである。これは川柳にでもあてはまるのではないか。俳句、短歌はともかくとして川柳の句集出版が少いようである。雑誌にのる句のよさと句集にのる句のよさとを違ふものである。川柳家も自費でどしどし句集を出したらよいと思う。川柳はまだ最上の認められない。川柳家はレジスタンスの意味でもつと句集を出してもよいのではないか。名も知れぬサラリーマンでもよいと思

う。ほのぼのの哀愁のこもつたサラリーマン的なものを一生に一冊ぐらい出したいものである。

人生はアンコールなど出来ぬなり

不在

つまるものにし  
た川柳  
増本翠露  
『つまらない。実に退屈だ。』と何度目かの不平をつぶやく。今日も朝から変わりばえのしない病床の時間をもてあましていた。丁度三者凡退がつましく生彩をかけた野球試合に、クリンヒットをかつたばしてくれと祈るような気持で、看護婦のMさんが注射に来るのを

待ちかまえていた。

ノックの音がすると私は「川柳雑誌」三三〇号の川柳塔を開き、潮花さんの句

「静脈へ時もなく恋もない注射」

を『こんなのがあがるがどう?』と指さしてみた。Mさんは大きな鹽をみひらいて句を讀み、『あら、私達にも詩はあつてヨ。毎晩ノートに書き止めているの。思つたことを素直にネ。でもそれは人に見せるものじゃないのヨ』と。そして何時も無言でテキパキ注射をして行くMさんは、ひとこと『さあ、いじめますヨ。』と云つて食事ガわりの注射を、五〇ccばかり静脈に入れてくれた。

私は口の中で繰り返した『いじめますヨ、いゝ言葉だナア』と。川柳的な親しみを含んだ言葉、何となく口に出た思いやりのある言葉、やはり彼女も詩人の一人だ。私は楽しくなつた。この時間を退屈するのは勿体ない、そらだ川柳に親しもう。

私はすべてのことに川柳を求めた。病床の間は何時の間にか退屈でなくなつた。お隣の患者さんの廊下での立話を聞けば、川柳が出来た。「何もせえへんに子宮癌」廊下がざわつく、入院患者だらうと思つていと必配そうな声が聞えてきた。「廊下の隅でやつぱり癌だつか」

O・B病院は癌が専門なので、私の周囲にはいろいろの癌患者がおられる。再発を気にしながら、「死にたいと言いつつ、退院して往きぬ」

あゝ川柳の知は何処にでもあつた。川柳の種子は何処でも育つてゆく、たゞ求めさえすれば。そして空虚な時間を人間陶冶の有意義な時間に知らない間におきかえていつてくれる。子供の頃のクリスマスのお爺さんのように――。

**O.S.K**  
のレディメイド

株式會社 **大阪商店**

大阪市東区米屋町一丁目  
電話東〇一七四五番

<b>石居高志</b> <small>東京都杉並区西 高井戸一ノ八三</small>	<b>大阪遷信病院</b> <b>烏ヶ辻川柳會</b>		<b>交 通 局 川 柳 會</b>	
	尾崎 方正 市場 沒食子 若林 草右 足立 春雄 中谷 ハナ子 西川 惠風 津村 神峰 吉田 斜水 井上 鴨水 井上 露芳 橋本 峰春 橋本 幸男 榎本 みのる 水谷 竹莊 木村 喜男 西辻 竹青 池戸 桃村 西口 比呂志 畑野 四郎 多田 禿天 森下 愛論 半田 夏生 客員 北川 春巢	北川 春巢 富岡 淡舟 浜畑 胡蝶 児島 与呂志 奥田 水月 橋本 雅巢 森 文夫 松岡 茶々坊 中林 進歩 岡島 孤舟		

いのちある句を創れ



投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正  
確▼開催月日及場所記入▼締  
切毎月二〇日▼投稿先本社宛

### 本社文化の夕 (大阪市)

十一月十三日 午後六時

於 光明寺

菊花薫る十一月の文化月、句会功労者

表彰と、柳人交歓短冊展の好計画に、続々

つめかける人々に本夕は、こよなき業し

き集いであつた。会場「なげし」に吊り下

げられた七十葉の短冊は会場を川柳化し

たアトモスフェアとする。開会に続いて

路郎師は岡山県の永松東岸氏の来会を紹

介され古方氏の句評は春集、白香、水客

の諸氏の句を引例し、初心者のおぬいた

句について語り路郎師は印刷の香も新し

い豆秋句集を携へ壇に立ち、数句を抜い

て豆秋調を讃え、カラーのある句を詠む

べきである。又文化祭の在り方について

も説かれ、句会部の功労者、紫香、潮花

両氏に感謝状と記念品を贈り、満場拍手

が沸く、文化の夕にふさわしき場面であ

つた。後ち席、兼題の披露に入り、本日

の不朽洞賞優勝カップは武部香林氏が獲

得し、文化賞の栄ある杯を受けた。時に

午後九時。

出席者■路郎・南風郎・武助・喜好・賀

杏花・悦朗・鮎美・久子・六竜子・都詩  
子・喜仙・葉光・香林・いわを・圭水・  
栗・凡九郎・東岸子・一平・三平・静馬  
真一・古方・登志子・清子・塗杖・一三  
夫・淡舟・豆秋・ゆずる・三司・万葉・  
紫香・春集・恒明・雄声・道也・梨里・霞乃  
兼題「外遊」 麻生路郎選

行つてすぐ帰るは派手な羽田港 六竜子  
落選のまだフランスに夢をもち 三司  
外遊のお帰り羽田へきざりに立ち 生々庵  
外遊も一人になつて淋しけれ 三司  
手真似だけ馴れて外遊帰つて来 彌平  
外遊の途中で聞いた社の閉鎖 静馬  
老らくの恋の外遊羨ませ 葉光  
外遊と決り会話の本も読み 賀峰  
いゝところはかり見て来た帰朝談 黙平  
外遊へ心づくしの海苔と汗 一三夫  
外遊で邪悪を精算するつもり 一平  
借金をしても外遊したいとき 恒明  
エチケツト守り外遊稍々つかれ 久子  
外遊中だけは神経痛も出ず 豆秋  
日本語だけで外遊して帰り 圭水  
あこがれの外遊遂に皿洗い 一平  
外遊をしてから身持納まらず 一十  
外遊のアリバイトラクに貼られ 淀月  
外遊が一ベン茶漬ほしうなり 十悟  
漫才の二人も外遊して来てた 凡九郎  
秘書殿の外遊抱持つただけ 同  
外遊のまんまとう／＼帰化して 同  
外遊のせめて片言喋りたし 香林  
飯鉢が来て外遊を羨まれ 万葉  
外遊に公費は水の如く消え 香林  
外遊をして丹前よさを知り 路郎

兼題「幕」 水谷鮎美選

杯の音も冴えて初日の幕があき 杏花  
幕開いたたん木戸まで呼び出され 淀月  
紙芝居こんなちつちやな幕あり 古方

幕降りる瞬間までは世を忘れ  
幕あいの長さアベツク気になら  
ダークチエジ幕の向うで生かえり  
幕を背の座長の声に沸く拍手  
開幕をせかす拍手へお富さん  
幕ごしに準備の音がすき通る  
幕降りるたびにお菓子を貰われる  
幕の幕今日飲びの水を打ち  
幕張つて立つたり坐つたり父多忙  
暗転の幕がかすかに風を受け  
まん幕の外へ空瓶ころげ出し  
緞帳に親しみがあがり母達者  
幕間の挨拶簡単ながそれによ  
面白い幕を残して出る二人  
ヒロインをスポットで包み幕さなり  
幔幕に風あり返り討悲し  
手品師の幕は大事な大道具  
幕引けば残りの雪が少し落ち  
現実にかえれと幕がおけて来る  
菊自慢今年は幕も張つて見せ  
尚魂は幕を下ろして吞ませる気  
地鎮祭神主の声幕をぬけ  
幕見ている間の方が楽しくて  
表彰式幕も嬉しく顔に触れ  
幕にして下さいお父さん頼みます  
兼題「音痴」 武部香林選

青い空音痴も唄つてみたくなり 久子  
義太夫をうって音痴が名を知られ 賀峰  
間違わず音痴が歌詞を知つてた 葉光  
手拍子を取つて音痴も悦に入り 雄声  
旦那芸音痴とお気付き遊ばさず 赤子  
呑む程に音痴が唄を横取りし 道也  
二次会であわれ音痴へ腹が来る 六竜子  
即席の手品で音痴うまく逃げ 南風郎  
酔うてる音痴を三味が持て余し ゆずる  
社長の音痴は秘書に助けられ 鮎美  
音痴にもよい御声ですと宮田輝 ひろし

とつときを音痴も二つ三つ持ち  
アンコール音痴も一緒に拍手する  
音痴とも言つて居れない仲人役  
栄転は音痴の唄に視される  
故事場のはずむ音痴の夕仕度  
音痴もうぬけ出す時期を考える  
同窓会音痴は音痴同志飲み  
風呂場では良い声になる父の歌  
音痴とは言わず渋いお声です  
校歌ぐらゐその校歌の音痴ぶり  
仲よしの音痴へ唄う勝負な娘  
君ケ代へ音痴は口をもぐ／＼し  
きつ／＼角帯酒よ音痴へ妓が惚れる  
手を叩く唄に音痴も口動く  
欄でると音痴名取りになるつもり  
うまいこと音痴を老妓糸に乗せ  
手拍子がテレコになつて音痴  
ねぶか節でよし父さんの嬉しい日  
母と孫思い思いの節になり  
悦びへ音痴ちいさき声のうた  
社長の音痴ぞう／＼師匠が唄を立て  
三味線は音痴をかばう音になり  
三味線にソツとさりとて見る音痴  
音痴とも知らず寝入つた子守唄  
宴会の最中音痴は忘れられ  
兼題「フラツシユ」 北川春集選

吾輩は名士フラツシユへそり返り 恒明  
フラツシユがまごも首相の苦い顔 都詩子  
戦後派の手錠フラツシユへキリする 久子  
フラツシユは労資が握手したころ 万葉  
フラツシユへ週末の汽車わきかき 賀峰  
フラツシユへ花嫁下を向いたまま 潮花  
写真屋が馴れてフラツシユ笑わせる 赤子  
フラツシユへ人気営業はよいボーイ 一三夫  
時の人フラツシユせめにマイクめ 清子  
ささやかなフラツシユに沸くクリスマス 淀月  
フラツシユをあびて特二の窓に立ち 賀峰

フラツシユをきけてア一の奥に消え  
 フラツシユへ罪の意識は顔を伏せ  
 フラツシユとア一に困る優勝者  
 大胆なポーズフラツシユを慌てさせ  
 豆歌手もフラツシユにギョッつけ  
 フラツシユへ真面目な顔で固くなり  
 フラツシユを浴びる秘仏の無表情  
 逃がっている顔へフラツシユも来  
 フラツシユでびつくりした目をそのままに  
 フラツシユへ踊り手振りせむし  
 フラツシユに注文がある顔で立ち  
 フラツシユへも悪びれぬ巾も持ち  
 フラツシユへア一は開けた顔で立ち  
 フラツシユへ練習不足テトごらり  
 鹿題「仲間」 西いわを遺

仲間から好いた二人が道を変え 喜 好  
 仲間から大鯛が来る嬉しい日 都詩子  
 金のあるのが仲間から消えてゆき 一三夫  
 金のない仲間が堅く誓い合い 葉光  
 くるま座になつて仲間の笑い顔 同  
 云いわけはみんな仲間のせいとされ 圭三  
 水入らず仲間が寄つた灯も楽し 杏花  
 仲間割れして残念な月の道 鮎美  
 斯く成つた仲間の一人悔いがあり 同  
 アルバムの仲間を想う日のベッド 久子  
 針と浮木だ仲間の助言で提げる魚籠 六童子  
 ニコソンのアブレ仲間へ朝の霧 悦朗  
 内祝 仲間の鯛が届けられ 潮花  
 仲間はうれされて無口な父の酒 淡舟  
 良い智慧も出ずに仲間の端に居る 文蝶  
 仲間からはなれて独り偉くなり 葉光  
 片隅に仲間外れは猪口を伏せ 黙平  
 鈍感な男仲間に入気あり いさむ  
 何時迄もニツクホームで呼ぶ仲間 武助  
 飲み仲間残り淋しい歳になり 赤子  
 父ちゃんも仲間に入る日曜日 東岸子  
 仲間割り済んで寄場の水を打つ 支武洞

まゝごとの仲間はうれが泣いて来る  
 前職が仲間知れて断わられ  
 手を切つてほしい仲間がきこい  
 蛙の子仲間外れの子と遊び 東岸子  
 坂登りきつて仲間と灯を囲み 鮎美  
 仲間から信心せよと誘われる いわを  
 鹿題「鉢巻」 八木摩天郎選

鉢巻へ一家五人の露を踏む 六童子  
 はちまきのこのはちまきが頭目か 古方  
 産褥の妻はちまきがいらしい 三平  
 はちまきの屋台は横へそれて行き いわを  
 はちまきでたずねて母に叱られる 潮花  
 日曜の父はちまきで鍼をもち 淡舟  
 はちまきをほどいてお茶をつぎに行き 賀峰  
 云われてからはちまきを取る慌てよう 恒明  
 鉢巻を締めて頭痛をおして出る 雄声  
 鉢巻がけんかの仲へ割つて出る 一朗  
 鉢巻で涙を拭う若さで 凡九郎  
 はちまきを子供にさせて肩車 葉光  
 はちまきをしめて昔のくせを出し 一平  
 はちまきが少しゆるんだ風下り 東岸子  
 頭から声張り上げた豆紋り 南風郎  
 鉢巻を締めた課長のかくし芸 いさむ  
 はちまきをしたも混る坐り込み 東岸子  
 鉢巻の白さへ勝利信じ切り 杏花  
 はちまきをしても師走のつめたす 圭三  
 鉢巻でちんつき威勢よく遣入り 紫香  
 はちまきが通すもんかと門の外 一平  
 デフレ／＼又はちまきを締め直し 文秋  
 腕組をしてはちまきは聞いてくれ 鮎美  
 はちまきの父に続けと子沢山 文蝶  
 はちまきも儲かりませんデフレです 圭水  
 はちまきのせぬ魚屋がたよりなく ひろし  
 はちまきが器用に結べもう名取 黙平  
 はちまきの下は日本の眼が光り 潮花  
 はちまきで握りの味を引立たせ 黙平  
 鉢巻をくくり直した朝のデモ 都詩子

はつといくをばれはちまきをよきぬ  
 鉢巻で課長も見せ大隠し芸 鮎美  
 はちまきに扇を持たす松づくし 南風郎  
 老のしわはちまき締めた五十年 三平  
 投げ売をするはちまきで汗をよき 万葉  
 はちまきのまんじ旦那の前に立ち 恒明  
 初声を聞いてはちまきはつこする 文蝶  
 はちまきをしてはちまきの子は女 潮花  
 義理固いのが鉢巻で汗をふき 梅志  
 一着で来たはちまきを解いてやり 賀峰  
 おみこわつしよ！僕の鉢巻とこへた 十悟  
 もめてんのかとはちまきのそりこ出 梅志  
 鉢巻でたいて大工飯にする 生々庵  
 帽子はちまきも止められず 生々庵

雑川 淀川支部句会（大阪市）  
 十一月九日 於 香林居 武部香林報

二男女妻の青春消えかかり 文平  
 合服も整え今日の秋日和 礼三  
 合服の要る日本で住みにくし 真一  
 まだ早い合服がゆく宝塚 若菜  
 茶柱が今朝北浜へ軽い足 六童子  
 茶柱へ祈る心も気の弱り 香林  
 茶柱の立つ程客も来てくれず 苑中

雑川 梅田支部句会（大阪市）  
 十一月二十五日 於阪神ビル四階会議室 鮎間杏花報

雀チユン／＼朝寝の窓に染しやう 鮎美  
 恥もななくうれし涙の手をにぎり 同  
 朝寝して茶漬がうまい二日酔 三司  
 腫病な犬が首だけ出して吠え 一夜  
 養子とる話五十の坂を越え 同  
 床下の犬へ届かぬ石を投げ 夢生  
 睦じい夫婦で養子とは見え 悦朗  
 野良犬のかなしき街の子におびえ 杏花

庶東料理

蓬菜

大阪なんば

書留が届き朝寝の床を抜け 同  
 アバートの話題の主は遅く起き ゆたか  
 時計気にしながら養子酔うて来ず 没洗子

雑川 池田支部句会（池田市）  
 於 阪急電鉄会議室 菊田いさむ報

渡り鳥こは日本の涯での涯で 古方  
 鉄のカーテンの中を知てる渡り鳥 冬香  
 渡り鳥嵐に向う輪を作り 杏花  
 渡り鳥帰還の船とすれちがいが 紫香  
 庖丁を持たすと別な人となり 鮎美  
 出稼ぎの子が帰らない秋祭 平  
 供出はともかく派手に秋祭 ゆずる  
 切株を御興の足が踏んでゆき いさむ  
 あめ一つ一つ分け合う貸切車 圭三  
 松茸の匂いが残る貸切車 潮花  
 貸切のような朝湯でひげを剃り 水香  
 コツペン実直すぎる平社員 紫香  
 子供汽車終点へ来てくれたをこね しょう

雑川 堺支部句会（堺市）  
 十月二十七日 於 摩天郎居 八木摩天郎報



裏口へ廻れと帖場無愛想 味平  
裏口へ魚屋の声大きすぎ 酔羊  
裏口へ女中の母が逢ひに来る 桃園

劇はねて裏へ廻つたサイイン狂 魯木  
裏口へ廻れと帖場無愛想 味平  
裏口へ魚屋の声大きすぎ 酔羊  
裏口へ女中の母が逢ひに来る 桃園

雑川 大聖寺支部句会 (石川県)

十一月十四日 於 貞人居 野村味平報  
欠席の理由課長に明されず 広志  
遊覧に行けぬ子の母父を責め 泥魚  
細々と生きて崩れぬ夫婦愛 晴路  
終電車吊車だけがゆれて行き 正司  
間に合つた汽車へ崩れるようにかけ 天風  
娘の素行ハンドバックに聞いて呉れ 一念  
ちよっここへ行くにもハンドバック持ち 素身郎  
チークダンス曲が終つてもやあす 同  
白い歯を見せて白々しいお世辞 星光  
末席の方へ酒豪が屯ろする 可笑  
トイレットハンドバックを持たされる 呑張  
看護婦の溜りダンスの真似をして 星光  
好調のパチンコタツプダンスで出 春光  
恋人へ万年床の慌てよう 万古  
ハンドバック片手は彼と腕を組み 同  
母さんの涙へ強気崩れかけ 春也  
肩書がズラリ並んだ披露席 春日  
ヨタ者のくずれにこんな仁義あり 千容  
遊覧のバスへ保険をかけて乗り 千古  
お座敷も寝室も兼ねてる裏長屋 峯豊  
吊革へ職場疲れの手が並び 斜木  
見たい処見えず遊覧急きたせ 同  
遊覧のバスも命をかけて乗り 白楊  
遊覧のバスで村の娘派手にした 千容  
ハンドバックを親爺の汗の金 五茶  
舞踏会窓はみぞれに叩かれる 春日  
仲人もダンスマニアとは知らず 同日  
堤防の崩れが目立つ文化の日 五茶  
紅一点の欠席皆の氣をもませ 桂月

雑川 京都支部句会 (京都市)

十月十六日 於 仲源寺 大鶴喜由報  
無処罰の罰は厳しいものを知る 蘇海  
人住めり賞罰あるを哀しとす 義行  
味褒めてもう一杯に困る汗 鳥雀  
ざくろの味が少年の頃を呼ぶ 豊次  
車引く前へくぼみがごとく居る 龜一  
まないたのくぼみ世帯の味をみせ 九角  
叱らば寝ない子と夜を秋の冷え 司郎  
卓に来る虫の命は短くて ゆきら

雑川 備前支部句会 (岡山県)

九月十一日 於 与詩雄居 浜田久米雄報  
名月を別々に見る倦怠期 やす子  
終点に来て名月にふと気付き 歌流児  
名月が木の葉がくれにある二人 正州  
橋の下から名月を見る身なり 次郎  
名月を二人のものにして歩き 柳風子  
終バスが小走りの女待つてやり 運平子  
繁華街こんなところにも纏のれん 与詩雄  
帳付で呑めるのれんを割つて入り 東岸子  
証人の汗へフラツシユよしとせ 久米雄  
失業ヘラジオの音が大きすぎ 浄美  
横綱が余裕を見せた初日なり 甘井子  
横綱を夢見ただけの角力とり 幸仙

雑川 下関支部句会 (下関市)

十月十七日 於 下関駅 石川侃流洞報  
きめられた数がさみしい吊し柿 良坊  
吊し柿にならぬうちから減つて行き 十字星  
柿のへた残して消える吊し柿 司楼  
吊し柿喰べて味覚の秋を知る 九呂平  
王冠を歯でこち開けて居る若さ 土築坊  
石油コンロ女房を朝寝じさしたけり ほなみ  
手の届くところから吊し柿は減り 侃流洞  
ハイキング王冠丈夫な歯で抜かれ 伊三男  
冬を呼ぶ野ばの吊し柿のへた かうたる  
乾杯へ王冠威勢よく抜かれ ポリチ  
好敵手夕飯までもよばれて来 柳慶  
どぶろくが家代々の祭酒 柳蛙  
王冠も三つ四つ混るおもちゃ箱 素人

雑川 篠山支部句会 (兵庫県)

小西無鬼報  
デフレ下に此の端た金役に立ち 小菊  
宿酔後の財布がぐやまれる 初穂  
ボケツトで半年寝てたはした金 枝葉  
はした金ではちと縁遠い値段札 無鬼  
健康のシンボルの様な寒稽古 薫  
端た金公金だから貰つとき 喜文  
下稽古広援団の声もかれ 秀水  
稽古事習わぬ母に励まされ 白猫児  
としよりの子だと言われ寒がり 文子  
寒がりの不躰オーバのまを託び 左文字  
寒そうに改札鉄ガチャつかせ 無聖  
ムツとして寒がりドアを閉めに行き ひか平  
きな臭うなつて寒がりあて出し 同  
偽せものひびりが多く流行り出し 亨  
習い初め一服父へ立て見せ 富女  
川雑部 ウイロー社句会 (ハワイ)

雑川 下関支部句会 (下関市)

急病に流行るお医者には間に合はず 紀南児  
謎の死へ医者は解剖のメスを執り 陽炎  
人並に医者も開業派手にやり 曉舟

雑川 篠山支部句会 (兵庫県)

M.D.の車雑沓何のその 一牛  
待合所診たい患者は科が違い 草一郎  
聴診器持てば役者も医者に見え 影法師  
奥様にだけ病名がささやかかれ 馬喜々  
手術台生死は医者の手に預け 虹橋  
処方箋只一枚で金五弗 浪之助  
御臨終ですの一声座がしまり 魔能亜  
母性愛医者の見立てに嬉し泣き エンヤ王  
御利益に頼れずなつて医者へ来る 緑風  
生きるための定石医者のまじり 笑有  
医者にたずねて退院の日を選び 銀水  
乱行は医者の言葉へ遠くいる 峯円  
診察所奥にはメイス投げる音 野渉  
大手術ドクターが神に見え 迷風  
重態は小声で室を出て知らせ 迷風  
不心得論すお医者も酒は好き 迷風  
誤診とは云わず余病が併発し 柳雨  
名医とて百歳迄は生きず逝き 東田橋  
お医者様金にいとめはきごんせん 泉  
真夜中の燈光患者の家と知れ 快夢起  
医者が匙投げてなおつた神頼み 泉水

品質優良  
先カワペン  
TACHIKAWA PEN  
大坂市東区豊後町四八  
立川商事株式会社

川 宇部支部句会 (宇部市)

国弘半休報

文化展日頃の無知が身に泌みる 豊年  
妻をもち理想へ負ける事多し 正夢  
孤兒院の少年母の夢をみる 千里  
少年を渾名で呼んで母も友 仙柳堂  
朝霧を乱して貨車は駅に着き 風来坊  
李徳全の名簿にも無い人を持ち 雪達摩  
金銀も砂も貨物の名でとどき 丸平  
実現の出来たは年をとつたこと 同  
このように育てはせぬ母の愚痴 盤茶  
日の丸を揚げて楽し文化の日 万盛  
猫の手もほしい師走の貨物室 風柳  
理想論だよと資本家取り合わず 井蛙  
シート着て貨物も眠る午前二時 雪峯  
少年の夢が大きく輪をえがく 雪達摩  
文化の日父は晩酌歌謡曲 粗影  
ブラットの通路をちぎって待つ貨物 半休

川 木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

仲人も一緒に写すゴールイン 明朗  
夕焼へ子供の合唱とけてゆき 駄句案  
コーラスで修学旅行帰つて来 綾美  
見えすいた甘言酔うたふりを 緋文字  
甘言を信じ夜汽車の窓に海い 遊子  
旦那さまなど明治の母は呼び 清夢  
飛び入りが勝抜き土俵帽子とび 十鳴子

川 大原支部句会 (岡山県)

於 凡平居

予期しない野次へマイクがさもり出し ゆたか  
リンベンの寝息をの灯にあわれ 一仙  
狸寝の息はことさら大きくし 青美  
寝息にしいく上る二階借り 凡平  
氷糞を持つ手寝息へのぞき込み 耕介

三代目そんな義理など知らぬ顔 恵二朗  
三度目の無心は母へそつと言い 喜美女  
身二つになるので家出まゝも 十坊  
情熱に負けた一夜の髪をすき 秋芳  
嫁ぐ日のせめては一番風呂に入れ 真  
駅一ツツがおそいハハキトク 地久平  
電報の二字違いがあわてさせ 米花  
一言の皮肉拳骨より応え 耕花

川 赤坂支部句会 (岡山県)

於 千流居

政田大介報

積善も不善もなく閑居の身 四郎  
暮仇の外訪う者の無い閑居 花蜂  
一人居のひまが朝酒まで覚え 永吞  
閑居して小人もとの愚にかえり 宇柳  
朝帰りほく笑ひ妻にギクリとす 土生  
借金へこんなきいた妻の口 佳目夫  
共妻妻の意見がまた通り 大介  
鍋蓋が組になる新世帯 千流  
電話口煙草の箱がメモになり 素人  
先生の恋を気づいた掃除番 一柳子  
大臣と云う教え子を持つ誇り 三四詩  
先生の恋へ世論が冷た過ぎ 大介  
口笛をダムにもたれて吹く孤独 清子

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

十月二十三日

森下愛論報

愛尼泣く声も交つた女風呂 恵子  
やせ薬はしそうな女風呂 哲弘  
女湯へモンロー型が消えて行き 三哲英  
赤ん坊にお湯かけながら悔み云い 一男  
女湯の前で待つてる若主人 哲泉  
女湯へ番台子供をリレーする つとむ  
女湯から出て若後家匂いたち 猿仙  
番台は女湯ばかり気をくばり 夏生  
女湯ものぞいて見たい年になり 幸男

お風呂まで井戸端会議持越され へナ子  
出たのかとのぞいて帰る女風呂 竹青  
女湯はテンヤワンヤと騒々し 秃天  
女湯へ遅く行くのは洗濯し 没食子  
子沢山声からしては女風呂 みのる  
釣銭を貰う間女湯チラと見る 愛論  
女湯で洗濯もする世帯ずれ 草右  
女湯はデフレーションも知らぬ様 喜男  
女湯の方はお喋りまだつゞき 惠風  
女湯の前まで赤ん坊だかされる 春雄  
女湯で刑事の妻は聞いて来る 春菓  
女湯にモデルの美女も引たたず 鴨水  
嘆くだけの松茸であり薄く切り 方正  
トング節になる頃松茸煮えつき 愛論

先輩も世帯やつれの手内職 史葉  
先輩と云われるだけの寄附の高 春雄  
先輩の二号と知らず惚れている 竹莊  
スリッパを引つて行く肥満型 桃村  
スリッパで庭へ下りたつ恢復期 方正  
スリッパの音でネクタイ締め直し 草右

みをつくし川柳会 (大阪市)

於 天王寺中学校

神谷凡九郎報

ど忘れを他人の話で思い出し 梨花  
踏切に貨車が停つた気のいらち 光二  
移民団子が年々に増えてゆき 正斗  
唇をかみしめて落葉の道をゆく 雄声  
寄つて貰う気飽もちましよう 葉光  
当のある風寝手枕してゐるなり 凡九郎  
きざじな使ひ子供も当があり 凡九郎  
坂道をバスのエンヂン派手をこ 凡九郎  
坂道を登りつめたら息を入れ 花香  
山坂のつかれ景色したわられ 凡九郎  
神様が「氏子の章」を配つて来 翠露

333川柳句会 (大阪市)

十一月十九日於 島野工業会議室

季節一品料理  
江戸前にぎりすし  
アペノ橋地下映画食通街

梅里の店

大萬

★大万川柳(第四十七回)を募る

兼題「秀才」路郎先生選

締切・一月十五日(句数五句以内)

発表・一月二十一日(店内掲示)

授句は 阿倍野区松崎町三丁目

一〇 大万川柳会宛

川村好郎報

決心がついた受話器をとりあげる 冗歩

チョンガのくまにくま馬鹿にされ 梅里

独身を待つは下宿の薄い夜具 雄声

独身のふれこみだけで客がつき 素男

ありあまる女があれどひとりの 同

独身の気軽身軽があてにされ 狂二

お茶をつぐ手つき婚期という姿 雄声

大和路の朝は茶がゆをすする音 柳香

朝寝坊茶漬でいつもすべり込み 雪山

満ち足りた朝のぶぶ漬塩こんぶ 好郎

大阪着夫婦雑誌は捨て降り 同

正月が一と月先に来る雑誌 同

附録だけ欲しい雑誌を貰うても 柳香

番台は雑誌読みつゝ金をとり 五句楽

淀の瀬に食らわんか船の影もなく 狂二

大阪で買うて帰つた京土産 康司

夕覧バス下戸下戸同志席をとり 夕霧

労資今日秋たけなわのバス愉し 好郎

吉田去れ祇園ざくらも代がわり 同

帝化川柳会 (大阪市)

九月、十一月

佐野白水報

迷惑な入荷市場へ放射能 乱酔  
帰還した夜更灯まだ消えず 白水

市場籠提げて足袋撰る年の市  
 失恋の痛み南の灯にもまれ  
 古池へ竿が並んだ日曜日  
 池釣りは敵同志のよう坐り  
 ままごとの市場大根の葉が並び  
 灯がついてプランコがゆれており  
 年寄の鉢巻だけは派手に締め  
 足袋買えば塗下駄欲しい女の子

南海川柳句会 (大阪府)

台風が来ると云うのによい月夜  
 月夜です千日前の横で知り  
 ボスターに書かれし裏を人は読み  
 ボスターに落書もなし村平和  
 性典などとボスター露骨すぎ  
 ボスターは主権者側にく目立ち

不朽洞 会から

▼路郎師は、南区医師会文  
 化部主催大和  
 路を訪ねる会  
 に招かれ、十

一月二十一日午前八時バスにて、  
 唐招提寺、葉師寺、法隆寺、奈良  
 へ周遊、奈良県観光課、松本猶重  
 氏の解説を聴取、杏林川柳会の人  
 々と楽しき一日を送られた。▼中  
 島生々庵理事長は十一月以来、健  
 康を害され目下療養中である。一  
 日も早く快癒されるよう祈つてい  
 る。▼水谷鮎美氏(尼崎市)は、  
 十一月十八日、三人のお子達と共に、  
 鶴方、波切、和具、吳座、賢  
 島の志摩めぐりを経て、参宮、後  
 ち湯の山温泉に入湯「秋晴の志摩

ボスターの職業輔導じつと読む  
 ボスターで見れば桜も咲いて居り  
 失業の眼にボスターの色が派手  
 ボスターで競馬の駅さの知られ

角一川柳白鷺句会 (大阪府)

歩きつゝ歌が生まれる秋の旅  
 反抗の無意味悲しき秋の宿  
 釣れそな池を見つけた秋の旅  
 野越え山越え秋の詩情にこける旅  
 いづ来ても泊る部屋なり秋の旅  
 痛む歯をおさへ世辞もいれんらん  
 歯痛歯痛あざみの花が憎たらし  
 ビンボケの写真が残る秋の旅  
 恋人に別れて歯痛また痛み  
 母の背の歯痛夜夜がきれいなり

川柳青蛙句会 (西宮市)

野次馬のうしろ野次馬背のびする  
 お茶漬で済ますつもりへ客が来る  
 居限りの隣の客がもたれて来  
 野次馬の後の方が威勢よし  
 野次馬の御意にかなうとく燃える  
 出発が再出発が日々の夢  
 迷惑をかけて火元は焼け太り

夢なんかみてられない庖丁忙しい  
 釣つて来りや庖丁までも任せて  
 ヒステリー傍の庖丁が気にかかり  
 秋晴れヘラストバツターのホームラン  
 小さいノノ憤りだつた秋晴れる  
 妻の歌風寝の耳へ秋晴れる

新会員紹介

野次馬へ巡查手をふり笛を吹き  
 野次馬の手前後へは引けぬらし  
 世話好きな父は迷惑苦にもせず  
 日置村青年団句会 (兵庫県)  
 十月六日 於 日置村役場  
 出口白猫児報  
 お祭があつてお宮も掃除出来  
 背広着て村の祭りの笛を吹く  
 凶作も豊作なみの祭する  
 豊作に森の鳥居もかざり付け  
 山車のない村は寝祭り喰いまわり  
 おみこしの声に酒宴の座がさびれ  
 子供連れみこしの前を逃げまわり  
 孫の出すお膳茶碗が隅へ寄り  
 祭だけ合う姉妹のよくしやべり  
 羽衣のような合羽が流行り出し

路の樹々は天へ伸びの句信を寄  
 せられた。▼本田恵二朗氏(岡山  
 県)のたよりに依ると、十一月岡  
 山句会に、二年振りの藤本清年氏  
 と会合、六日夜久々にて歓談、秋  
 宵惜別の夕であつたこと。な  
 お十二月五日の第五回説者川柳大  
 会に、路郎師揮毫軸並に愛用の同  
 師筆銘々皿を会場へ出品展鑑され  
 たこと。▼上田春柳氏(大阪  
 市)宅に今回電話が架設された。  
 電話戎④九六二八番。▼福島鉄児  
 氏(岡山県)からの消息によると  
 「川柳せんべい」は売行上々、近く  
 贈答用として、販路拡張する外「川  
 柳饅頭」も、併せ発売すべく目下  
 試作中とのこと。正月から発売さ  
 れると。▼岡村牛耕氏(岡山県)か

岡山山にて病氣加療中の令妹に  
 川柳作句をすゝめられ一面、同女  
 を慰撫するため今回の山陽新聞説  
 者川柳大会へ離床同伴を楽しみに  
 しているとおたよりがあつた。  
 小西無鬼氏(兵庫県)は十二月十二  
 日本社忘年句会へ、酒井ひか平、  
 前川左文字両氏同伴出席、散会後  
 懇親宴に参会された。▼路郎師歓迎  
 のつどいを十二月五日午後六時か  
 ら岡山県健保の岡山寮に開催され  
 た。出席者は大介、牛耕、方大、  
 表大橋、久米雄、風来子、十九平、  
 忠美、千容、灯竿、恵二朗、格二、  
 鉄児の諸氏。▼麻生路郎先生は十二  
 月七日午前八時五十分、山陽ラジ  
 オから「ラジオ茶ばなし」を放送  
 された。▼新川博也氏(大阪府)は

十一月廿五日華燭の典を挙げら  
 れ、泉北郡高石町富木石田喜三郎  
 氏方に新居を定められた。▼戸田古  
 方氏(池田市)は今回豊中市本町  
 三丁目二〇一へ転居 (摩)

十二月  
 山川阿茶(大阪府)正  
 生々庵氏推薦

正 誤  
 ▼十一月廿八頁最下段四行目及  
 び三十四行目ひろしとあるは何れ  
 も喜好氏の句の誤り。▼十一月号冊  
 一頁最下段四行目は味平氏の句、  
 七行目は光郎氏の句の誤り。▼十二  
 月号二三頁上段六行目、百七十六  
 篇は百六十七篇の誤りに付訂正

謹賀新春★川柳雑誌社編集局

麻生路郎  
 福田山雨楼  
 麻生霞乃  
 麻生梨里  
 戸田古方  
 市場没食子  
 北川春巢  
 丸尾潮花  
 真鍋一瓢  
 八木摩天郎  
 中島生々庵

# 柳界展望



氏笑美三るけ於に華會展品作笑三

に句集刊行記念  
句会は十一月二  
十八日午後一時  
金塚会館にて開  
催、路郎師始め  
百三十名出席、  
立錫之余地なき  
盛会、岡山県か  
ら浜田久米雄、  
大森煥句楽、土  
井雷山の三氏来  
会、句会後席を

（岡山県）十一月例会は、十四日  
午後六時から南中学校で十二月例  
会は十二日観音寺で開催。▼岡山  
市の山陽川柳同好会五周年記念句  
会を、十一月二十二日山陽新聞本  
社会議室で開催。▼川雜弓削支部  
（岡山県）からの消息に依ると、  
十一月十三日津山朝日新聞紙上に  
「何から何まで川柳づくめ、川柳  
の町弓削を訪う。」と云う見出し  
にて写真入りにて照会、町民へ大  
きな反響を与えられたとのこと。  
▼川雜大原支部句会は十七日夜六  
時から地久平居で十一月句会を開  
催、地久平氏が連続カップを受け  
られた▼路郎師は、今回東京都台  
東区役所内に初代川柳句碑再建委  
員会が設置され初代川柳遺吟「木  
枯し」の碑再建につき発起人を懇  
請されたので快諾された。▼梶川  
蘇堂氏（吹田市）は、十二月四日公  
用で高松に出張、途上、紫雲丸か  
ら「公用は屋島にのぼるひまもあ  
り」の句信を寄せられた▼早川野  
甫氏は大阪府三島郡島本町広瀬一  
八八府住島本二七六へ転居▼富士  
松醉歩氏（堺市）は十年振に帰堺  
「糖跡にちくま見つけたざるの湯  
氣」の句信を寄せられた。

▼本社新春句会は一月九日（日）  
午後一時から下寺町二丁目市バス  
停前の光明寺で開催される。▼南  
区医師会杏林川柳会の忘年句会は  
十二月廿一日午後七時半から法善  
寺横丁にしむらで開催。▼山陽新  
聞社主催第五回読者川柳大会（岡  
山市）は、十二月五日麻生路郎師  
を迎え午前十時から山陽新聞社楼  
上で開催、出席者一七〇名、投句三  
〇〇名の盛会。▼川雜アベノ支部  
忘年川柳会（大阪市）は十二月十六  
日夜西光寺で開催、以上何れも路  
郎主幹出席▼大阪通信病院川柳会  
の忘年句会が十二月十日午後六時  
からアベノ松崎町割烹「大万」で開  
催▼川雜淀川支部句会は、一月十  
五日午後六時から東淀川区三津屋  
北通四ノ二九武部香林居で開催さ  
れる。兼題「初出勤」「眼」「鼻」  
の三題。▼既報川雜阿部野支部主  
催本社後援の須崎豆秋還歴祝賀並

移して有志の祝賀宴開催。▼川雜  
堺支部（堺市）は、十六日午後六  
時から同市九間町山の口勝摩天郎  
居にて十二月句会開催。▼川雜篠  
山支部句会では、会員の畑小菊女  
史の抹茶席に招かれ一同茶室で柳  
境にひたられた由。▼川雜宇部支  
部忘年句会は十二月十一日に開催  
された。▼岡山電報局の川柳句会  
は、十一月四日午後一時から同局  
にて開催、風来子、十九平両氏  
出席。▼川雜弓削支部（岡山県）  
は、四日午後六時から沼部呉服店  
に於て十二月句会を開催、町長杯  
は久米女士獲得。▼川雜岡山支部  
句会は、七日夜六時から社会福祉  
会館で藤本清年氏歓迎句会として  
十一月句会開催。▼川雜倉敷支部

（岡山県）十一月例会は、十四日  
午後六時から南中学校で十二月例  
会は十二日観音寺で開催。▼岡山  
市の山陽川柳同好会五周年記念句  
会を、十一月二十二日山陽新聞本  
社会議室で開催。▼川雜弓削支部  
（岡山県）からの消息に依ると、  
十一月十三日津山朝日新聞紙上に  
「何から何まで川柳づくめ、川柳  
の町弓削を訪う。」と云う見出し  
にて写真入りにて照会、町民へ大  
きな反響を与えられたとのこと。  
▼川雜大原支部句会は十七日夜六  
時から地久平居で十一月句会を開  
催、地久平氏が連続カップを受け  
られた▼路郎師は、今回東京都台  
東区役所内に初代川柳句碑再建委  
員会が設置され初代川柳遺吟「木  
枯し」の碑再建につき発起人を懇  
請されたので快諾された。▼梶川  
蘇堂氏（吹田市）は、十二月四日公  
用で高松に出張、途上、紫雲丸か  
ら「公用は屋島にのぼるひまもあ  
り」の句信を寄せられた▼早川野  
甫氏は大阪府三島郡島本町広瀬一  
八八府住島本二七六へ転居▼富士  
松醉歩氏（堺市）は十年振に帰堺  
「糖跡にちくま見つけたざるの湯  
氣」の句信を寄せられた。

（摩）

小児科

## 平尾醫院

大阪市南区日本橋筋二ノ七〇  
電話 戎 一六四三番

### 謹賀新春

速水真珠洞

福岡市博多下店屋町

脇田梅子

大阪市南区西櫓町二一  
電話南〇三二二九番

川雜西成支部  
土井文蝶

大阪市西成区松通九ノ二二

川柳雜誌社ハワイ支部  
ウイロ一社

同人一同

沢田四郎作 若本多久志

大阪市西成区玉出本  
通一ノ一三  
小児科・沢田医院  
寓居 大阪市上福島南三ノ七一  
自宅 金沢市七宝町十五



### 公・私・雑・記

★謹んで新年の御挨拶を申し上げる——と世間並みの雑誌の書くようなことを書き出したが、その突はまた十幾日間多忙な日を繰返さないとならぬ。愛読者諸賢の新年の机上へ間違ひなくお届けしたい念願のもとに、ヒゲをあたるとひまもなく、時には食事までカツ飛ばしてシヤニムニに働き続けている。★新年号は予想以上に内容が豊富になつたので、十二分よるこんでいただけと思う。★表紙も題字を横にして少し感じを変えて見た。★新年号を新年号らしくしようと、ひつじの年だから、羊のことを書いたり、ひつじの句を拾うたりするといふいき方をやめて、ひたすら内容の充実をはかつた。僅に「初詣」という川柳座談をやつてもらつて新年号らしい匂いをさせたに過ぎない。新年号をどこまでも新年号らしくすると、そうした月並から脱して自由なやり方をするのと、どちらがいいかは愛読者諸賢の御意見に俟つつもりである。★「吾れ若し妻なりせば」のアンケートはいささか甘いテーマでもあるので、どうかしらと思つていた

が、大変面白い御回答を得たのでよるこんでいる。御多忙の中を特に御回答下さつた諸氏に厚くお礼を申し上げる。★なお原稿がフクソウしたので、次号に割愛させてもらつたことを執筆者におことわりしておく。しばらく中絶のかたちとなつていた拙稿「新川柳鑑賞」も希望者が多いので本号から又々連載することにした。★昭和廿九年は私にとつて多忙に明け多忙に暮れたが、昭和卅年は更に多忙になるのではないかと思つている。しかし出来る限りガン張るつもりであるから、御鞭撻と御支援をお願いする。本誌は弘く社会と取ツ組んでいるので、デフレの風も相當に強かろうと予測している。しかし、内容を充実させること、誌代の低廉という点では、何処までも兵古垂れず押し進めてゆく覚悟である。戦時中の難関を突破して来たことを思えば、何ほどのことやらあらんと意気は相変わらず旺んである。★私の健康については、いつも案じていただいているが、まだ少々ムリはきくようである、御安心が願いたい。柳界のために、もう少し仕事をしておきたいと思つているので捨て身で働いている。文化事業などと云うものは、自分の健康のことばかり考慮して出て来る仕事ではない。やむにやまれぬ心からやるのである。★十二月に山陽新聞社主催の読者文芸川柳大会に招かれ

岡山に出かけるのに、汽車の中まで仕事を続けたので、岡山へついたその夜から健康を害し新聞社や支部の人たちに迷惑をかけたが、それでも翌日の大会の使命だけは果たした。そして大会の散会後、私の宿で私の歓迎宴が開かれた。臥床の枕許で宴会をやつてもらつたのはこれがはじめてであつた。お茶一つ呑めなくても親しい人達の宴会をジツと見ているのはユカイだつた。僕は矢張り酒が好きなのだと思つた。宴会の最中、寢床から抜け出て、次の間で、懇望されるまま、山陽ラジオの「ラジオ茶話」のロク音をやつた。臥床していても私に多忙はつきものであるらしい。これは届版してからのことであるが、あまりに多忙なので、通信病院川柳会の忘年会を忘れ、外出先から戻らないので家族や幹事に大騒ぎをさせてしまつたという失敗もやつた。しかし今後は大いに気をつけるつもりだ。いよ／＼新年を迎えたら少し時間の余裕を見つけて柳友諸君と大いに語りたいたいと思つている。御寸暇はお運びが願いたい。少し位の酒は用意しておこう。★別稿広告にもあるように一月十一日から十六日まで、アベノ近鉄百貨店の美術部で、米田三男之介画伯と合作色紙展を催すことになつている。どんなものが出来るか、覗いていただきたいと思う。(路郎生)

## 謹賀新春

川 雑 池 田 支 部  
 阪 池 市 東 市 町 町  
 一 七 八  
 戸 田 古 方  
 黒 川 紫 香  
 村 上 ゆ ず る  
 竹 内 圭 三  
 小 池 し げ お  
 永 藤 彌 平  
 菊 田 い さ む

### 川 雑 鳥 取 支 部

大 西 八 歩 藏 多 陽 月  
 河 村 日 満 岩 田 保 鏡  
 森 本 法 泉 子 森 田 若 人  
 増 田 耕 民 岡 島 芳 道  
 杉 谷 湖 山 五 百 川 〇 し  
 田 中 遊 星 北 村 三 歩  
 岩 原 喬 水 岩 田 秀 和  
 大 村 小 松 福 田 た か し

川 雑 櫻 島 支 部  
 丸 尾 潮 花  
 山 口 秋 花  
 野 本 吞 水  
 真 鍋 一 瓢

大阪府泉北郡高石町富木  
 石田喜三郎方  
 新川博也

## 募 集

課題吟募集  
 失業 (廿句) 須崎 豆秋選  
 名 士 (廿句) 美鴨 美笑選  
 子 沢 山 (廿句) 水谷 鮎美選  
 寄 附 (廿句) 逸見 灯竿選  
 (二月二十日締切)

毎号募集  
 近作柳樽(雑詠廿句) 麻生路郎選  
 川柳塔(雜 詠) 北川春巢選  
 文章(評論・研究・感想其他)  
 (毎月廿日締切)

### 投 稿 規 定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。  
 ▲『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。  
 ▲『課題吟』は何人でも投句が出来る。  
 ▲『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

## 川 柳 雑 誌

B 列 5 号 毎 月 一 回 一 日 発 行  
 定 価 四 〇 円 (送料四円)  
 (戦時禁) 半 々 年 二 六 四 円  
 一 々 年 五 二 八 円  
 昭 和 廿 九 年 十 二 月 廿 五 日 印 刷  
 昭 和 三 十 年 一 月 一 日 発 行  
 大 阪 市 住 吉 區 南 瓦 町 五 丁 目 二 五 番 地  
 行 務 部 麻 生 幸 一 郎  
 大 阪 市 住 吉 區 南 瓦 町 五 丁 目 二 五 番 地  
 行 務 部 麻 生 幸 一 郎

## 川 柳 雑 誌 社

發行所  
 電話 住吉 六八八  
 番 番 口 座 大 阪 七 五〇 五 〇

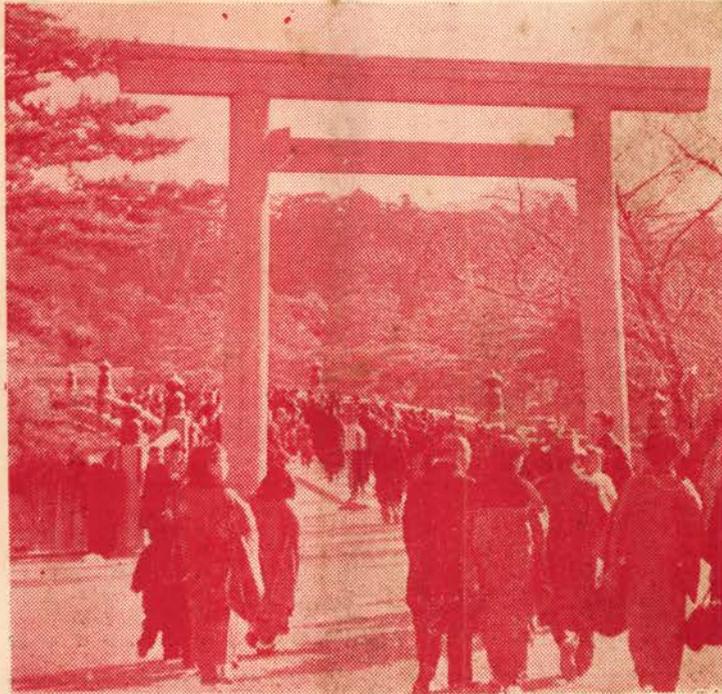
Printed in Japan

行發日一月一年卅君昭...本誌印刷日五廿月二十年九廿和昭 (行發日一回一月毎) 可認物便郵種三第日一月七年二廿和昭

# THE SENRYU ZASSHI

NO. 332

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.



春はよし伊勢の切符を2枚持ち 路郎

お伊勢さん初詣は暖い近鉄特急でノ

上六発 7.40 8.40 11.40 14.40 16.40 18.40

座席指定 特急券5日前から下記案内所で発売(片道200円)

近鉄観光案内所 上六@1970 アベノ@7020 千日前@7713 淀屋橋@8861

大阪市天王寺区  
上本町6丁目

**近畿日本鉄道**